君が消えるその日まで

TRUENO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君が消えるその日まで

【Ｎコード】
Ｎ８３０１Ｃ

【作者名】
ＴＲＵＥＮＯ

【あらすじ】
無免許運転で愛車ＡＥ８６に乗って世界最大の峠バトルの最中に対戦相手の反則トラップに引っかかり大事故を起こした１３歳のひろしが病院で入院中に隣の美少女ツンデレキャラ立花ゆかりとの２人の日々を切なく語る恋愛系ラブコメディー、

第1章「終わり、そして始まり」（前書き）

これから始まる切ない物語は完全フィクションです、
これから始まる切ない物語は3次元ではなく2次元(アニメ)で想像してください。

第1章「終わり、そして始まり」

第1章、終わり、そして始まり

ピーーーーーーーーーーーーーーーーーー
「先生！！心拍数が非常に低いです！！」
「先生！！血が止まりません！！」
「先生！！急いでください！！」
「ガーゼ、鉗子、鑷子」
ピーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ここは??
龍平はどこだ??
なぜ真っ暗なんだ??
その時かすかに誰かがしゃべった、
「やり残した事はあるか?」
は!?
再び質問された、
「人間界でやり残した事はあるか?」
他にも
「親友に伝えたい事はあるか?」
と質問された、
正直言って俺は心の底から「はぁ、こいつは頭が逝かれてるんだな」
と思っていた、
ちょっと強い感じに「逝ってるのは君だ!!」と言ってきた、
こいつは俺が考えてる事が解るのか??
「そうじゃ、解るとも」と即答した、

俺は頭が混乱しそうだからこう言った、、、、、
「なぜ俺はここにいる??俺はブラックザールスのリーダの高橋とレースをしていたんだぞ!!」
俺と話してるやつは即答した、
「君はもうレースはできない、いや、レースどころか何もできない」
俺は怒った、「おい!!俺はまじめに質問してるんだ!!ふざけんなよ!!」
話し相手はこう言った、、、、、、、、、、、、、、
「君は峠のレースの相手チームが仕掛けたオイルで滑って谷底へ落ちて死んだのだ」
俺は耳を疑った、
しかし、レースをしている時を考えるとあの世界的に有名な悪魔のカーブと言われているコーナーを曲がる時までの記憶しかない、、、、
じゃあ、俺は死んだのか!?
話し相手は「あぁ、君は死んだ、もう二度と戻れる事はない、そしてあと2時間ほどで永遠に闇をさ迷う事になる」と馬鹿げた事を言った、
ふざけるな!!俺は死んでない!!何も悪い事はしていない!!なのに永遠に闇をさ迷うハメになるのはごめんだ!!
その時にあせりながら話し相手は言った、
「言っておくがこの闇の世界では人間界よりもはるかに時間が経つのは早いぞ、大体人間界での1時間はこっちだと1分になるぞ」
そんな、、、、、、
じゃあ、
俺はあと2分で永遠に闇をさ迷うのか!?
「いや、残り４６秒だ」と話し相手は普通に言った、
待て!!
「待てない、」と即答しやがった、
いやだ!!いやだ!!

「何をそんなにあせっているんだ??」と笑いながら言いやがった、
「人は誰でもいつかわ死ぬ、君はちょっと早く死ぬだけなんだぞ、
おおあと13秒だぞ」と言いやがった、
俺は元の世界へ戻るんだ!!
いや、戻らなくてもいいんだ、これは夢なのだ!!
夢だ!!夢だ!!夢だ!!夢だ!!
「これは夢ではないぞ、さてさて、残り8秒だ」
夢よ覚めろ覚めろ覚めろ覚めろ覚めろ
「7」
「6」
「5」
「4」
「3」
やめてくれ!!
「2」
元の世界へ戻してくれ!!
「1」

ピリリリンピリリリンピリリリンピリリリンピリリリンピリリリンピリリリンピリリリン

「先生!!心拍数が増えました!!」
「先生!!血は止まりました!!」
「よし!あとは針でぬって血液を注入しよう」
「ハイ!!」

「ん?」
見知らぬ天井が目に飛び込んできた、続いて俺は顔を右へ向けた、

「窓??」大体４階ほどの高さだった、続いて左に顔を向けた、
「病院!?」
俺はびっくりして起き上がろうとした、が！ほぼ全身に包帯が巻いてあるためあえなく失敗、
その時に看護婦さん３名とドクター２名が部屋に入ってきてこう言った、
「はじめまして、ひろし君」「君は仲間に運ばれてきたが正直言って生きているのか解らなかった、、手術中一時的に心臓が停止する事もしばしありました」じゃあ俺は事故ったのか、、、、、、
ドクターの片方の人が「これから３ヶ月間僕、渡辺が担当になりますのでよろしくおねがいします」と心よく俺に言った、
って３ヶ月間もここでじ～～～～～っとしないと駄目なのかよ！！
それでドクターと看護婦さんはあいさつをして部屋をあとにした、
でも、、、
さっきの暗闇での出来事はなんだったんだろう、夢なのか？それとも、死神だったか??
もし手術が成功しないであのまま闇の世界へ行っていたら何も見えなくて何も言えなくて何も聞こえないに違いない、、、、

ありがとう、死神様。。。。。。

あの思い出したくない闇の世界へ行ってきてから２週間ほどたった。ドクターや看護婦さん達にもなれて個室だった俺の部屋は共同部屋へ移った、同じ部屋の人達も友達になってくれた、病院もなかなか楽もしい場所で結構気に入ってたりもしている俺だが１つ悩みがある、悩みとは隣の個室にいる少女の事だ、少女と言っても小さい子とゆうわけじゃない、ちょうど俺と同じ年のちょっぴり可愛い子だ。彼女とは一度も話した事はないし声も聞いた事ない、しかも彼女は車椅子でトイレに行く時以外はほとんど部屋から出てこない。

「何をにっこりしてるんじゃ？」と隣のベットの年寄りが声をかけた、「いや、病院は想像以上にユカイな場所なんだなと思っていただけです」向かいにいる若い人はギター片手にこう歌った「病院は最高ぅ～～きれいな看護婦さんもいるし何もしなくて良いぃ～～」この人はいつもギターを弾きながら自作の歌を歌っているのだ、「ほ！よ！は！と！さ！」と黄色で目立つブラジルのサッカーチームのユニフォームを着ながらリフティングをしている若い人もいる、ってかこの人達はこんなに健康良いのになぜ入院しているんだ？？ゴーーっとドアを開けて「こら！中島！！病院でサッカーをやるなと何度言ったら解るんだぁ！！」と気の強い看護婦さんが怒鳴った「いやいやこれはサッカーじゃなくてリフティングですよ」とユニフォームを着た中島さんが言い訳を言った、

「口答えすんじゃねぇ！！」と看護婦さんはいつものようにチューブで首を絞めた「あ！く！苦しい！！ごめんなさい！！」と泣き叫ぶ中島さんだが今回は機嫌が悪いのか「ごちゃごちゃうるせぇ！！テメェが悪いんだろ！！」と言って首を絞め続けるがドクターが「おはようございます」と眠そうな顔で入ってきたので中島さんはギリギリ助かった。

「おやおや、今日もにぎやかですねぇ、でもここは病室ですよ」とドクターは苦笑いしながら皆に言った、

が、病室ではギターを弾いてる人もいるしリフティングしてる人もいるしエロ本を読んでるじじいもいるし携帯電話などは使用禁止なのに端っこでメガネを掛けてパソコンで株の取引をしてるまじめそうな人もいて皆全くドクターの言う事を聞いてないようだ。

ドクターは俺と年寄りの点滴を新しいものと取り替えてさっさと出ていった

、その時に一枚のカードが落ちたが誰も気づかない、しかたなく俺はカードを拾ってドクターへ渡そうとしたがカードの顔写真を見ると隣の個室の美少女の顔だった、俺は顔が熱くなってきたから急いでドクターにカードを渡してベットへ戻った、その時に看護婦が「

渡辺さん、立花ゆかりさんの話し相手をしないでいいのですか？？」
とドクターに質問したらドクターが「そうだな、この病棟で立花くんと同じ年なのはひろし君だけだな」とドクターは言ってこっちへ来た、「へ？俺が隣の個室の子の話し相手をするんですか！？」と俺はあせりながら言ったらドクターが「あの子は気短でわがままだがすぐに慣れるよ」と意外な事を言った、
正直あの子は願望などなくて言われるがままに行動するのだと思っていた俺だった。。。。

翌日、俺はその子の病室の前へ来た。
この時、俺はドキドキしてたに違いない、
こんな時にドキドキしない人なんている訳がない、なぜなら彼女はちょっぴり可愛い顔をしているからだ。
意を決して俺はドアをノックした。
コンコン
「誰！？」
とおびえながら喋ったのが聞こえた、
俺は「あぁ、えぇ～っと、と、隣の病室で入院してるひろしですけど入って良い？？」とカタコト語っぽく言った、
数秒経って「どうぞ」
と寂しそうな声で答えてくれた。
ガラガラーと軽いドアを開けた、
彼女は布団で身を隠し「なによ、」とツンツンした感じで言った、
「あぁ、その。う～～、」と俺、「ようがないんなら出てってよ」
と彼女、
俺はとりあえず話題を考えようと思って色々考えたら1つの小説が目に飛び込んできた、
その小説のタイトルは「障害者の僕」だった、俺は「小説好きなのか？？」と聞くと「そんな事聞きに来たの！？だったら帰って！！」

と彼女は怒鳴った。
俺は「SF小説なら読んでるよ」とニッコリして言ったら「SF小説の何が好きなのよ」と言ってきたから「涼宮ハルヒの憂鬱シリーズが好きだよ、特に涼宮ハルヒの消失は泣けたよ」と言ったら「ふぅ〜〜ん」と答えた。
その時彼女は俺の顔をじぃ〜〜〜〜っと見つめた「ん？俺の顔に何か付いてるか？」と聞くと「ねぇ、死ぬのって嫌だ？？」と馬鹿げた事を質問しやがった、
とりあえず「あぁ、死ぬのは嫌だよ」と答えた、「でも、人は誰だっていつかは死ぬのよ、私は少し死ぬのが早くなっただけ」と彼女は何所かで聞いたようなセリフを言った。
俺は「何でだ？どこか悪いのか？？」と質問したら
「心臓」と即答した、
俺は意表を付いた、こんなに若いのに心臓が悪いなんて、、、、、
俺は今何かやってあげられないか？？と思ってこう言ってしまった
「何か頼みごとはあるか？？何でも聞いてやるぞ」と、
そしたら彼女はこう言った
「ふぅ〜〜ん今何でもって言ったわね？？じゃあ４丁目にあるケーキ屋でデラックスチョコミックスケーキ買ってきて」と。。。。

もしかしたら今の言葉が俺と彼女との運命の出会いだったのか。。。。。。。

第2章「思い出の場所」

「ヘックション！！」
「うぅ～～寒ぅ～～～」
なんでこんな寒い時期に外へ出ないとダメなんだ、
「ヘックション！！」
しかも車椅子なのに何でケーキなんか買ってくるハメになるんだ、
くそ、なんでもやるなんて言わなければ良かった。

２０分後、
「ほれ、買ってきたぞ」と俺はケーキを渡した、
彼女は「ん、本当に買ってくるなんてバカだねあなた」と言いやがった、
何だよせっかく買ってきたのに、
いまいましい、
さてと、もう暗くなってきたし部屋に戻るか、
「じゃあなまた明日くるよ」と行って帰ろうとしたが、
「来なくて良い、邪魔だから」とちょっと寂しそうな感じで彼女は言った、「そうか？でも俺も暇だから明日も来るよ、じゃあな」と俺、
ドアを開けたら、
「ありがとう」
と照れ隠ししながら俺に言ってくれた。
「おぅ」
ガラガラーすとん、
俺は自分のベットへ戻って飯を食って眠りへついた。

翌日、
コンコン、ガラガラ
「おはうわ！！」
バシ！！
「やったぁ！！」
「なにしやがるこのやろう」俺の顔面にりんごとみかんを投げてきた、
彼女は見た事のないにっこりした顔で笑っていた。
「おはよう」と俺は言い直した、
彼女は「来なくていいって言ったでしょ」と布団で顔を隠しながら言った、
「でも俺だって暇なんだよ」と優しく言ったら布団から顔を出して
「じゃああそこに連れてって」と言われたがあそこじゃあ解らない
「あそこにある不動山のてっぺんに連れてって」と彼女は言った。
「よしわかった、いつ行く??」と質問したら「今日」と即答した、
「おいおい、いくらなんでも早すぎないか」「今日が良いの、今日は何日だと思ってるの！？」と真顔で質問された、
やべぇ、のんびりしすぎて日にち考えてなかった！！
「解らないんでしょぉ～～」
くそ、見抜かれた、
「図星でしょ、ねぇ図星でしょ」と言いながら顔を近づけてきた、
「あぁ、図星だよ」と認めたが彼女は「そんな事より昨日買ったケーキ持って一緒に不動山登ろうよ」とワクワクしながら俺のおねだりした、
しゃあねぇ、連れてってやるか
「よし！仲間呼んどくから着替えててくれ」
「うん！！」なんと可愛い声なんだ！！

数分後、

コンコン
「入るぞ」
「う、うん」
ガラガラーー
「うほ！！」
おもわず声を出してしまった、
それもそのはず！！
彼女が私服を着るたのは初めてでしかもすっげーー可愛い！！
「ん、なによ見ないでくれる」と照れ隠しで言われた。
「そういえば、私達は車椅子だけどどうやって行くの？？」と質問されたが心配ご無用、
「大丈夫、考えがあるから」「あんたの考えは信用できないわ」と言われた、
その時！！
ブンブン
ヴォンヴォン
ブーーン
ウーンウーーン
「何々！？」と彼女はびっくりして窓から外を見た、
「お、来たなぁ～～、よしケーキ持って行くぞ」「え！？」
俺と彼女はエレベーターを使って外へ行った、
「おぅ、ひろし、死んでるのかと思ってたぜ」と暴走族の頭が俺に言った、「死ぬわけないだろ、そんな事より俺のバイクは持ってきたか？？」と質問したらそいつは「あったりめぇ～～だぁ～、そこのトラックを見な！」
デコトラから出てきたのは俺が乗っていた旧車のＣＢ２５０Ｎホーク３があった、
他にもＮＲ５００やハーレーや２３０Ｚやそのほか色々あった。
俺はＣＢ２５０Ｎホーク３に乗って彼女を後ろに乗せて計５０人位の族で不動山へ向かった。

この時彼女はビックリして声も出ていなかった。
途中で警察に追われる事もあったりブラックエンペラーのやつらとストレートでレースしたりもあったが無事に不動山へ着いたがこのバイクでは登れない、今は歩けない俺と彼女はあきらめ掛けてたが仲間がデコトラのコンテナの中から俺のランドクルーザーを出した、
「そうだ！！これだ！！」「え？」と反応する彼女、
俺と彼女はランクルに乗り換えて仲間達にはここでまっててもらう事にした。
ようやくてっぺんへついた、きずいたらもう夜だった。
彼女と俺は車から降りて車に置いてる傘をまつばづえがわりに使って小さい展望台に登った、
「はぁ〜〜〜〜」っとかなりうれしそうに彼女ははしゃぐ。
俺と彼女はベンチに座った、
「ねぇ。」
「ん？なんだ？？」
「名前なんだっけ」
「ひろしだよ」
「そっか、ひろしか」
「あぁ」
「私の名前は由香里よ」
っそういえば名前を忘れていた、
「あぁ、解った」
「ねぇ、ケーキ一緒に食べよ」とにっこりして由香里は言った、
「俺もいいのか？？」
「良いよ、だって」
「だってなんだよ」
「ここでひろしと一緒に食べたいから買ってきてもらったんだよ」
とてれながら言った、
「そうだったのか」
「私、学校行った事ないんだ」と由香里は呟いた

「多分、死ぬから学校に行けないと思うけど」
「何を言ってるんだ！！お前が死ぬわけないだろ！！」
本当の死ぬわけない、
「でも、私のお姉ちゃんとパパは同じ心臓の病気で死んだんだよ」
お姉ちゃんもいたのかぁ、
「そうか、、、、」「でもお前は絶対に死なない！！」
「ありがとう、少し自信が付いたわ」
「そんな事よりケーキ美味いね」と笑顔で言った、
「あぁ、昨日買いに言っといて正解だったよ」
そういえば、「どうしてここへ来たかったんだ？？」
「パパが8年前の今日にここへ連れてきてくれたの」
だから毎日窓から外を見ていたのか、
「でもパパと会ったのはその日が最後なの、、、、」
ん、
「そうだったのか」
その時、由香里は俺の手をつかんで歩けないはずなのに立った！！
しかも俺も立てないはずなのにギリギリ立てた！！
そしてゆかりは「死にたくない。。。。」と言って俺にもたれかかった。
この時、俺はこの子は本当にかわいそうな子なんだぁと思った。。。。。。

翌日、
俺は由香里の病室へ行った、
コンコン
ガラガラー
「ふぇ！？」と由香里が声を出した、
俺は夢かと思った、
「こ、この、この野郎！！着替えてる途中に入ってくるな！！出て

け！！」と由香里が怒鳴ったと同時に本やりんごやみかんや鏡を投げられた、
しかもそれがモロに顔面に直撃して鼻血が出た。

数分後、
「許してくれ！！」と叫びながら俺は由香里の所へ行った、
由香里は説得したら何とか許してくれた。
しかし由香里はこう言った。

「でも条件が１つある」

第3章「楽しい時間　、別れ」

「えぇ！！」「絶対無理だよ！！」俺はこの世が一時停止したのかと思った、
「何で？いいじゃない別に」と由香里は当たり前のように言うが正直「不可能だ！！」
「ふぅ～～ん、いいんだぁ～～」と由香里は上機嫌っぽく言った、
「な、何が？」と質問したら由香里はとんでもない事を言った「車椅子のくせして夜中にこそこそと病院抜け出して友達の家に遊びに行ってる事渡辺先生に言っちゃおうかなぁ～～」
くそ！！こいつ寝てるんじゃなかったのか！？ってかなぜそんな事知ってるんだよ。
「わ、わかったわかった言うとおりにするから言わないでくれよ」と俺はあせりながら言った、
「じゃあ早速作戦考えましょ」とゆかりは笑顔で言った、
はぁ～、俺、絶対警察行きだ、、、、、、

翌日の夜、
俺とゆかりは竹やぶ中学校へ向かった、しかも車椅子で。
疲れないようにゆっくり行ってたのだが、
「痛い！」途中でゆかりが指を怪我してしまった。
「大丈夫か！？」とわざと大げさに言ってやった、
「痛いぃ～～どうしよう、、ここまで来たのに、、」と悲しそうな声で言った、
俺は「どうする？病院に戻るか？」と聞いたが「やだ、絶対に嫌だ」と悲しそうな顔で俺を見つめた。
そのかわいいそうな顔を見てしまった俺は１つ良い事を考えた。

数分後、
「よぅひろし、」と俺の親友の龍平がＲ３４に乗って来てくれた、
「悪いな、こんな夜中に呼び出して」と俺は言ったが「峠の神様に頼まれたら断れるわけないだろ」と余計な事を言いやがった、
俺はごまかそうと急いで由香里を後部席に座らせて車椅子２つを折りたたんで助手席に置いて由香里の隣に座った。
由香里は龍平が無免で乗っている事を知らず龍平に話しかけた、
「お兄さんの車かっこいいですね」「え！？お兄さん！？」と龍平はテレながら言った、俺は「こいつは無免で乗ってるんだよ」と由香里に言ったら「へぇ～～」っと普通に納得しやがった。
５分ぐらい経った頃に由香里は俺に質問した、
「ねぇ、峠の神様って何？？人を助けたの？？」
「うぇ！」っとあせって声を出してしまった、
「い、いや、そのぉ～～、と、峠のてっぺんでふざけて俺は神様だ！と言ったからだよ」と俺はごまかした、
が！！
「ひろしは世界的に有名な峠の最速の車とバイク男なんだぞ！！しかもそれ以外にもクロカンやラリーやドリフトやモトクロスレースの優勝者なんだぞ！！」と龍平が余計な事を言ってしまった！！
由香里はと言うと、、、、、、
キラキラした目で俺の顔を見つめながら「えぇ！？すごい！！なんでもっと早く言わなかったの！？しかもひろしも無免許運転なの！？」と感激している。
「ってか何に日か前にバイクに乗ったけど無免だとゆう事に気づいてなかったのか？？」
「だってあの日は暴走族にびっくりしてそんな事気にしてなかったんだもん」と由香里は言った、
「それと去年はＢＭＸのフラットやパークで優勝したんだよ」とまたまた龍平が余計な事を言いやがった！！
「えぇ～、何なのかさっぱりわからないけどひろしってすごいんだ

ね！！」と由香里はうれしそうな顔で言った。
「まぁ、趣味でやってるだけで別にプロとか目指してるわけじゃないからね」と俺は言ってやった、

数分後、
色々話しをしててようやく竹やぶ中学校へ着いた。
龍平は「俺は集会があるからこれでしっけいする、じゃあな」とさっさと行ってしまった、
「さてと、始めるか、」と俺は言った、
「うん」と真面目な顔で由香里は返事した。

翌日、
新聞を見てみるとやはりこの事件が表紙を飾ってた、
その時に由香里が始めて俺の病室へ来てくれた、
「ベットに一緒に座って良い？」と可愛く由香里は言った、「うん、良いよ」
俺と由香里は仲良く新聞記事を見ていた。
数分後あの気の強い看護婦さんが来た、
「ねぇ、ひろしぃ、校庭落書き事件って知ってる？？」と看護婦さんは言った、
「えぇ、知ってますよ、特にアニメオタクの人が知ってるんですよね？」と俺は言った。
看護婦さんは俺の点滴を取り替えてさっさと別の病室へ行った。
そのうち眠くなってしまい俺と由香里は同じベットで昼寝してしまった、

由香里はこう言った
「ねぇひろし、将来私と結婚して」
「え！？そ、そんな、い、良いの！？」

「良いよ」
由香里は俺にキスしようとした、
俺の唇と由香里の唇の距離は5センチ以下、
と！！その時！！

「おっす、ひろしぃ～～久しぶりぃ～～エロ本買ってきたぜ！！」
と友達の古泉が来た、
俺と由香里は起きた、
「あ、夢か、、、、」と俺
「あ、夢だったんだぁ、、、、」と由香里、
古泉はびっくりして5秒間ぐらい固まって持っていた袋を置いて走って逃げてしまった。
由香里は袋を取って中から頼んでもいないのに古泉が買ってきたエロ本を出して俺の顔の前にやってこう言った、
「へぇ～～ひろしってこうゆうのに興味あるんだぁ～～」と言った、
ヤバイ！！この状況をどうごまかせばいいんだ！！
「あ、あぁ、それはそのぉ～、古泉が昔から持ち歩いてる宝物なんだよ」と変な事を言ってしまった、
「へぇ～今月号のが昔なんだぁ～しかもまだビニールと値札ついてるのにぃ？？」と由香里は言った、
や、やばい！！
「最低！！」バシ！！
由香里はエロ本をテレビに投げていそいで車椅子に乗って急いで病室へ行ってしまった。
隣の年寄りとサッカー好きの中島さんが俺のベットのカーテンを開けて「もしかして」と言いながら小指を立てた、
俺は布団の中に隠れた、
「しょうがない！あきらめるんじゃ！」
「女なんていくらでもいる！」
と年寄りと中島さんは言った。

俺は一人で病院の屋上へ行った、
「はぁ～、早く退院してこんな事忘れてぇ～～。。。。。。。。。。。。」

翌日、
俺は由香里の病室の前まで来た。
「ごめん！！由香里！！許して！！」
「いいわよ！！こっちこそごめんね！！」
なんてなるわけないもんなぁ～～、多分、いや絶対由香里の事なら
「うるさい！！」など「あっち行け！！」など「もう会いたくない！！」とか言われるよなぁ～～～～。
俺は由香里に会うのはやめて病室へ戻った。
「はぁ～、何で俺は校庭落書き事件なんか実行してしまったんだろう」
そう、看護婦さんが言っていた校庭落書き事件は俺と由香里、いや俺がやったのだ。
俺は普通の患者のように寝て食って寝て食ってを一週間ほど続けていた、
俺は最近少しだけだが歩けるようになっていた。由香里の事を忘れるために病院の裏にある誰もいない湖の所へ来た、そこにはベンチもあるし気持ちいいし空が良く見えるから結構気に入っている場所だ。
俺はベンチに座って買っておいた缶ジュースを飲んでいた、
しかし、余計由香里の事を考えてしまう、「あぁ～～、由香里ぃ～～会いてぇ～～よぉ～～」と俺は一人で呟いた。
「ゴホン」
と後ろでわざとらしいせきを誰かがした、
俺は首を上え上え曲げて後ろへ顔を向けた、そこには由香里がいた。

「由香里！」俺はビックリして立ち上がって由香里の前へ来た
「あ、あのぉ～、て、天気良いね」と由香里は言った、しかし今は曇りだ、「あ、あぁ、そうだな、」と俺は答えた。
「ごめんね」
ん！？今何と言った！？ごめんね！？　たしかにそう言った！！
由香里の性格だとごめんねって言葉は一生言わないはずだ、なのに、
「あ、あ、ご、ごめん！！」と俺は気持ちを込めて謝った、
由香里は「あのぉ、こ、ここ座っていい？？と」由香里は俺に聞いた、「あぁ、い、良いよ」俺は言った。
ゆかりは端っこに座って一人ぶんのスペースを確保してくれた、「ひろしも座りなよ」と由香里は優しく俺に言ってくれた、「お、おぅ」
俺は由香里の隣に座った、「そ、そういえばゆ、由香里も歩けるようになったのか？」と聞くと由香里は「うん！」と笑顔で答えた、
「なぁ、何で許してくれたんだ？」と俺は聞いた、由香里はこう言った、
「あのねぇ、今朝テレビ見てたら占いで喧嘩した相手と仲直りすると病気が治るかもって言ってたから」
は！？「じ、じゃあそれがなかったら？？」「絶対仲直りしないよ」
「ふざけるな！！」
俺は持っていた缶ジュースを投げてその場から逃げた。
そう、これで良いんだ。。。。。。。。。。。

第4章「再び、そして」

カランカラン、
缶ジュースがアスファルトの地面に叩きつけられる音。。。。
その時、由香里はどう思っていたのか、
それは由香里しか知らない。。。。。

翌日、
いままでは決まった時間に点滴を打たないとダメだったが今日からは点滴は無しになった。
だけど俺は気がのらない、
「あんた、由香里に何したの？」と看護婦が言った、「別に。。。。」と俺は答えた、
「落ち込んでたよ、由香里ちゃん」え？「由香里ちゃん、本当はひろしの事が好きなんだよ」「そんな訳ないですよ、、、、」「さっき言ってたぞ、私は冗談で言ったのに、、、、って」冗談？嘘だ！！「待ってるよ、ひろしが行くのを、由香里ちゃん」待ってる訳ない、「まっ、私が知ったこっちゃないけどね」と看護婦は言いながら部屋を出た。
その日も俺は普通に食って寝る食って寝るを繰り返してすごしていた、
ん？スリッパを履くときにベットの下に何かがあった、
「本？」本を拾って表紙を見ると、「障害者の僕」だった、
「由香里の！？」そう、その本は由香里と昼寝した日の忘れ物だ。
俺は気づいたら由香里の病室の前に来ていた、「はぁ～、」戻ろう。
結局その日も食って寝る食って寝るで終わってしまった。

翌日、

看護婦が来た、
「あれ？点滴終わったんですよね？？」
看護婦は黙ってる、その瞬間！
パシン！！
俺はビンタされた、
「てめぇ！！それでいいのか！！残り少ない命を持ってる由香里を幸せにしたいと思わねぇのか！！」
周りで騒いでる患者さんは一気に静まり返った。
「このまま悲しい気持ちで由香里が死んでもいいのか！！」
俺はなぜか涙が出た、、、
そう、「俺だって由香里を幸せにしてやりたいよ。。」「だったら何でそんなひどい事ばっかするんだ！！」俺はもっと涙が出た、「泣くな！！てめぇは男だろ！！」泣きたくない、でも由香里の事を考えると自然に涙が出てしまう、「でも、結局由香里は悲しい思いをするだけです」「っそんな訳ねぇだろ！！」「由香里はもうひろしと会いたくないから別の病院へ転院する事に決めたんだぞ！！」
ドシ！！
今度はぐーで殴られた、
それで看護婦は行ってしまった、「大丈夫かい？」と周りの患者さんは言うが俺は無視してふたたび湖へ行った。

「転院」

その言葉だけが心に染み付いている。
「転院」
由香里は転院してしまう。
そう、これでいいんだ。
どうせあのまま仲良くしても由香里は死んでしまう、もし死ななくても退院したら徐々に離れて行っちゃう。
そう、これでいいんだ。。。。。

「おい！女の子を大事にしろよ！！」と声がした、そう、死んだ親父だ、「解ってると、でももう無理だ」「無理じゃない！！早く彼女の所へ行ってやれ！！」「だから！！」
あれ？？
い、今のは、、
親父？？
いや、そんなはずない、だって親父は死んでるから、
だが俺の周りには誰もいない。
夢？幻覚？？幽霊？？？
な、何だ！？頭がフラフラする、、、、
何だ！？
バタン！！

ん？ここは？俺の病室か？「っとゆう事は夢か？」「夢じゃないよ」看護婦が言った、「え？じ、じゃあ何でここに？？」「あんたが湖の前で倒れてるのを由香里ちゃんが見つけて知らせてくれたんだよ」え？由香里が！？「じゃああれは幽霊だったのか、、」「は？幽霊？なに寝ぼけた事言ってんの」と看護婦が笑いながら言った、「お前は入院する時外的怪我だけじゃなくて脳にも異変があったから油断するなよ」と言いながら去って行った。
3分ほどぼぉ～～っとしていたが俺はスリッパを履き由香里の病室の前へ来た。
「すぅ～～はぁ～～」俺は深呼吸してドアをノックしようとした、
その時！！
ガラガラ「バカ！！」
由香里は俺の腕を引っ張り俺の病室へ入って俺のベットに俺を寝かせた、

「あ、あのぉ～～ななんで？」「なにが」「なんでここに？」「寝てないとダメでしょ」と言いながら由香里はパイプイスに座った。
「ねぇねぇ」「ダメ」「まだ何も」「ダメ」「だからまだ何も言って」「ダメ」「あ、あのぉ～～」「ダメ」由香里は全て「ダメ」で否定した。
「ト、トイレ行きたいんだけど」「じゃあ早く行ってきて」俺はいそいでようをたしてきた。
俺が病室に戻って自分のベットのカーテンを開けたその時！！
「うわ！！」バシ！！
みかんが顔面に直撃した。
由香里は「あはは当たった当たった」と喜んでる。
正直当てられた瞬間はムカ！っときたけどその笑ってる顔を見るとなぜか嬉しくなる、
俺はカーテンを閉じてみかんを拾ってこう言った、
「由香里、ごめん！！もういやな思いはさせないから転院なんかしないでくれ！！」と俺は精一杯気持ちを込めて叫んだ。
「え？何が？？」は！？「え？だ、だって転院するんでしょ？」「誰が？？」「え、だから由香里が」「なんで勝手に被害妄想するのよ！転院なんてする訳ないじゃん、ひろしバカみたい」と俺の頭を持っていた本の角でコツンと叩いた。
「え！？だって気の強い看護婦さんが、、、、あれ！？」
「えへへへへ」カーテンを開けるとその看護婦さんが爆笑していた、
「お前バカだなぁ～由香里ちゃんが転院なんかする訳ねぇだろギャハハハ」「ひろし、なんで私が転院なんかしないとダメなの！？もしかして嫌いになったの！？もしかして他に好きな人がいるの！？」と由香里が顔を近づけて泣きそうな顔で俺に言った、
「え！？ちょ、だ、だって看護婦さんがこの前言ってたから、だからてっきり。。。」「え？あたしが何か言った？？」と白々しく言いやがった「まぁそんな事よりお二人さん仲良くしなよ」と言いながら看護婦さんは別の人のベットへ行った。

「ん！？とゆう事は由香里は転院しないんだね？？」「あたりまえよ」「良かったぁ～」「よくない」と言って俺にデコピンしやがった。
「い、痛ぇよ」「痛いのは生きてる証拠よ！罰よ罰！」と言いながら俺をベットに座らせて頭を軽くポコポコと叩きやがった。
「わ、解ったから解ったからやめてくれよぉ」「しょうがないわね。」
「なぁ、由香里」「何？」「そんな硬いイスに座らないでこっちに座れよ」「え、う、うん」俺は枕もとにあぐらで座って由香里は俺の前のほうで腰をかけている、
「あ、あのぉ～由香里、」「ん？何？」俺は引き出しから本を出して「これ忘れ物だよ」と言って渡した、「あ！これ探してた大事な本よ」「え？大事ってなんで？？」「秘密」と可愛い顔で否定した。
「ねぇひろし」「ん？？何？」「歩けるようになったから散歩しよ！」と笑顔で言った、「おぅ、そうするか」「うん！」

俺達は立ち上がった、その時！！
シャーー
カーテンが開いた、「お、やっぱりここにいましたねカップルさん」
「え！？か、カップル！？」と俺と由香里は同時に言った、「まぁそれより大事なお知らせがあります」大事なお知らせって何だろう？？ってか由香里の顔がマジで赤くなってる、
「あなた達二人は退院あと１０日間で退院しできます！！」
世界が一時停止したかと思われた。
「え！？本当ですか！！？？」
一番喜んでいるのは由香里だ、それもそのはず由香里は生まれてから入院し続け一度も病院の周りとあの日俺と由香里で行った不動山しか行った事ないのだ！！
「それからそれから今日はひろし君のお友達さんが来てますよ」友達！？

「よぅ！ひろし！」「こんにちはひろさん」「生きてたかひろし」
「ん？そちらのお嬢ちゃんは？」やってきたのは俺のクラスの隆平と森井さんと池辺とこの前来た古泉だ。
由香里は「誰」と言った「あ、あぁ、こいつは俺の同じクラスの隆平と森井さんと池辺とこの前来た古泉ほら、龍平はこの前竹やぶ中学校に行くときに世話になったじゃん」「あ、こ、こん、にちは」とやや緊張気味で由香里は挨拶した。
池辺が俺に「もしかして、これ？？」と言いながら小指を立てた、俺は慌てて「ち、違う、そそそんな訳ない」と言ったが由香里を見てみるの顔が赤くなっていた「あれぇ～～ほんとにちがうのかなぁ～～？？」とまたまた俺に言ってきた「ほ、ほ本当だよ」由香里の顔はさらに赤くなっていてしまいには布団で顔を隠していた。
「ま、まぁここじゃなくてとっておきの場所があるからそっちに行こうぜ」と俺は言った、

数分後、
俺達は裏にある湖へ来た、
「おぉ～～」っと龍平が声をあげたそれにつられて森井さんと古泉と池辺も「おぉ～～すっげぇ～～」と言った。
それで俺達はベンチに座って俺の過去のことを由香里に話しやがった。
「なぁ、知ってるか？ひろしが入院する少しまえに友達が高校生の柔道部にリンチされてひろしは怒ってその高校まで一人で殴りこみに行ったんだぜ！！それで俺たちはひろしをつけてってたんだ」と古泉が言った、由香里はと言うと、、、、
「えぇ！？嘘ぉ！？そんなの今まで聞いたことないわ！！ひろし！なんで私に隠し事してたの！！」と怒り始めた「だ、だって恥ずかしいから」と俺は言った、由香里は「で？それでどうなったの？」と古泉に質問して古泉が続きを話しやがった。
「最初は１０人位いの柔道部部員全員をボコボコにして次に空手部

へいてそでも全員ボコボコにして次は校長室まで行ったんだぜ！！それででかいメガネを掛けた校長は何だね君！用事があるなら職員室へ行ってくれと言ったのに校長の顔面を殴ってこう言ったんだ、てめぇ！！校長だったら生徒を真面目に教育しろよ！！あんたみたいな奴がいるから今の生徒はバカばっかで悪い事をするようになるんだよ！！そんないい加減にやってるんだったら校長やめちまえ！！って、しかも校長までボコボコにして他の先生達が止めに入ったのに他の先生までボコボコにしてそれで翌日新聞の表紙にその事件が載ってもいつもどおり平気な顔できたんだぜ！！考えられるか！？」と長々と無駄な事を語りやがった。

由香里は黙り込んでいた、やばい由香里怒ったか！？しかし、由香里はいつも持っている本を開いて一枚の紙を出した、それを広げた、

「まさか」

「ひろし、これの犯人はあんただったのね」と例の新聞見ながら言った。

俺は一応謝った「す、すまねぇ由香里、、、、」「別に謝る事なんてないんだよ、逆に私がお礼を言いたかったんだよ」「え！？」「実は私、入院してて手術をする事になったの、でもその手術は本当に難しくて成功する確率はほとんど0だったの、でも手術しないと死んじゃうの、だけど怖くて手術しなかったのね、そしたらこの新聞を見てあぁ、この人は本当に勇気のある人だわ、って思ったの、それで私は決心したの、手術をするって」そうだったのか、

他の奴らは黙り込んでいた、

「じゃあ、もしその新聞を読まなかったら？絶対」「そう、死んでたわ」「そうか、、」由香里は立ち上がって俺に抱きついた、そして、

キスをした。。。。。。。。。。

第5章「あたりまえな日常」

「へ、へ、っへ、ッヘックション！！！！」
「あぁ～～最悪ぅ～～～」今日は本当に最悪だ。
「あんたが悪いんじゃん。」
ん！？読者の皆様、何か変だと思いませんか？？
今日宏と由香里はキスをしたのです、なのにこんなになってるなんておかしいですよね？？
実はこんな事が起こったのです。

「じゃあ、もしその新聞を読まなかったら？絶対」「そう、死んでたわ」「そうか、、」由香里は立ち上がって俺に抱きついた、そして、

キスをした。。。。。。。。。。

しかし俺は足元で何か変な感触がした、俺はキスしながらちょっと下を覗いた、「うぎゃあ～～～～毛虫踏んじまったぁ～～～～！！」
俺はビックリして慌てて走り回って湖へ落ちてしまった。

「へ、へ、っへ、ブェックション！！！！！！」
「ちょっと！二回もそんなくしゃみしないでくれる！」
「す、すまねぇ、」
「今日一日ゆっくり休んでて！！」と由香里は怒った。
「おぅ」
俺はベットで横になった、由香里は横でパイプイスに座っている。

「ねぇ、」「ダメ」「じゃなくて」「ダメ」「だ、だから」「ダメ」
「そうゆう事じゃなくて」「ダメ！」また由香里の必殺即答「ダメ」
攻撃が始まった、「ダメって言ったらダメ！」
「じゃなくて！！」俺は積極的に言った、
「ッ！？」由香里はビックリしてダメ攻撃をやめた、「そうじゃなくて、俺は、、、」
「俺がなによ」
「だ、だから、お、俺はおまえの、、、」「何よ！男ならはっきり言いなさいよ！」俺は意を決してこう言った。
「俺、お前を絶対守ってやるからな、、、、、」やっと言えた！！
しかし由香里の状況は、、
顔がホッカホッカに真っ赤かになってかなり熱がありそうだ、
「っだ、あ、あああああたあたあたあたりまえよ」うん、いつもの由香里だ安心。
「あ、あ、あああんたがわた私を守るななんてじ、じゅじょじょうしきの事よ！」とかなりツンツンして照れ隠しで言っている、しかも全く隠せてないし、
俺はもっと由香里と仲良くしたいし幸せにしたいから「こっちこいよ」と言った、
「わわわわかわかったわよ」と言いながら俺のベットに腰かけた、
「なぁ、学校楽しみか？」と聞くと「ピタ！！」とテレツンモードは終了した、ちなみにテレツンとは今の由香里みたいにテレながらツンツンしてるとゆう意味なんだ。
「うん、すっごく楽しみよ」そうだよな、由香里は一度も学校へ言ったことないんだもんな、「俺は面倒だからいやだなぁ」と言った、でも実は由香里が居ればスクールライフは楽しくなると俺は思ってる。
「学校のご飯はおいしいの？？」と由香里は聞くが中学校からは給食はない、「給食はないよ、自分で弁当を持ってくるんだよ、まぁ弁当とパンは注文できるけどね、当然美味いけどやっぱり母の味の

弁当持っていったほうがいいよ」と俺は気楽に言った、
「そう、でも、お母さんは私がこんなんだから逃げちゃったの、、」
俺はいままでで一番驚いたのかもしらない。
「え！？じ、じゃじゃあ退院したらどうすんだよ」と俺は質問した
そしたら「橋の下にダンボールでも置いて暮らそうかな？？秘密基地みたいで楽しそうだし」と馬鹿げた事を発言しやがった！！「それで本当いいのか！？」と聞いた「うん、だってどうせそのうち死んじゃうもん、だったら迷惑かからないようにひそかに影で死んだほうがいいじゃん」と笑顔で答えやがった！！
「ふぇ！？」と由香里は声を出した、その理由は、俺が抱きしめたからだ、
「さっき言っただろ、お前を守るって、だから来いよ居候、いや、俺の家に住めよ、」
「あああああたあたあたりまえよ、さ最初からそそそのそのつもつもりだだったのよ」また始まったぜ、
「お前、もしかして私物は病室にある物だけか？」と言っても服と本しかないような気がする、「そうよ、病室にある物だけよ」「そうか、、、」由香里は俺の足を軽く触りながら「ねぇ、今日宏の友達が言ってたのって本当なの？」と聞いてきた、本当だ、「あぁ、本当だよ、本当は言いたくなかったけどな」この時、由香里は何を考えてたのか、それは由香里にしか解らない。
俺達はそんな感じに色々話していた。
しかし、いつの間にか俺と由香里はまた一緒のベットで昼寝をしてしまった。
俺は普通に寝て由香里は足をベットから出して俺の足を枕にして寝ていた。

俺の唇に何かがあたった、
長い、長い、
ずぅ〜〜っと何か柔らかくて感触が良い物が俺の唇に付いてる、

離れた、

「宏、宏、起きて、宏、」
「ん、まだいいだろ、」
「宏、起きろ」
「まだいいだろ由香里」
「何甘えてるの！」
「早く起きて！！」
「もうちょっとまってくれ、」
「早く起きろこのゲスやろう！！」

「は！！」

・・・・・・・・・・・・・・
夢か、、由香里は！？俺はもしかしたら由香里が死んで幽霊になって話しかけたのか心配だったかが、
良かった、由香里は少しよだれをたらしながらぐっすり寝ている。。
当然由香里のよだれは俺のズボンに付いてる、が、こんなに可愛く寝ている由香里を起こしたくない、ずぅ〜〜っとこのまま一緒にいたい。

「由香里、君が消えるその日まで、俺はお前を守ってやるからな。」

翌日、
俺が起きたらもう次の日になってた、
由香里！？
足元を見ると由香里がいない！！
が！！
「遅い！どうせHな夢でも見てたんでしょ！」と言いながら横でパイプイスに座って本を読んでいた。

「良かった、」
ん？「お前、俺の顔に落書きとかいたずらしなかったか？？」
「え！？そ、そんな事す、する訳ないわ！！子供じゃああるまいし、」と由香里は焦りながら言った、「俺の口に何かつけたか？？」と聞くと、由香里は本で顔を隠しながら「し、知らないわよ！ゆ夢でも見てたんじゃないの！？本当にバカなんだから」と焦って言った。

「じゃああれは夢だったのか、」「そ、そうよ夢に決まってるわ、私キスなんかしてないもん」
「そうか、由香里はキスしてないか」
ん！？キス！？何で！？何で今キスって言ったんだ！？
「なぁ、」
「ん？何？？」冷静だ、さっきまで焦ってたのに、「寝てるとき口になにか違和感感じたんだけど」
「ふぇ！？だ、だだからしし知らないってて言ってるでしょ！！」
焦ってる「そうか知らないか、すまんな、感じ違いして」「うん、」
「今日は結構寒いな」「うん寒いねぇ～」「すぅ～、でもまだ口が変な感じするんだよなぁ～～」「しし、知らないわよ！それよりささ寒いからわた私にも布団よよよこしなさいよ」焦った。
わかりやすい女だ。
「そうか疑って悪いな、ほら布団貸すよ」「うん、ありがとう。」
「しただろ、」「ふぇ！？」「俺に」「ななな何をよ！」「俺にしただろ」「ななな何の事だかささっぱりわ解らないわ」「俺にキスしただろ、解ってるんだよ」「してないもん！！」「嘘だぁ～」「する訳ないじゃん」「本当か？？」「ほほ本当よ！」「そうか、ごめんな、」「うん、」
それから数秒沈黙が始まったが、
「由香里、俺にキスしただろ」
「・・・・・・・・ごめんなさい」小さい声で由香里は謝った、やはりそうだったか。

「したらしたでいいんだよ、」「え！？」と由香里は目を一瞬大きく開いて反応した、
「俺は本当の嘘つきは嫌いなんだ、解りやすい嘘は嫌いじゃないが」
「本当にごめんなさい・・・・」由香里は謝った、
「良いんだよ、」と言って俺は由香里の頭をなでた、「えへ」っと可愛い声を出してくれた。
こんな楽しい時間が一生続けば良いのになぁ～～～～。
しかし、現実ってのは意外と厳しかったりするんだ、もしかしたら由香里は今死ぬかもしれないんだ、
俺はそれが一番怖い。
もし由香里がいなくなったら俺はどうなるのか？
「なによ」と由香里が言った「何さっきから私の事じろじろ見てるのよ気持ち悪い」「あ、いや、由香里がいつもより可愛いいから」

「バカ」

第5章「あたりまえな日常」（後書き）

始めまして読者の皆様。
最近小説を書くのが楽しくなります！！
全く面倒だと思いません。
僕は中学2年の男子です、
彼女居ない歴１３年です（涙）
僕が小説を書くきっかけになったのは多分そんな事が自分にあったらいいなぁ～、とゆう願望から生まれたのだと思います。
それでは、失礼します。。。。。

第6章「新しい世界」

「宏ぃ～早く早くぅ～～」と由香里は笑顔で俺のベットまで来てくれた、「あ、あぁ」
「早くしないとおいてくよ！」と嫌味な感じに言われたがそれは由香里なりのジョークなのだ、「お、おぅちょっと待ってくれ」俺は急いでペンを持ってキャップを取った、「何してるの？早くしてよぉ！私だけじゃあ持てないんだから！」なぜ由香里はこんなに笑顔で急いでるのかと言うと今日は待ちに待った退院の日だ、「早くぅ～～」「待ってくれ」俺はベットの下の横のところにメッセージを書いた。

「由香里、君が消えるその日まで、俺はお前を守ってやるからな。
ｄｙ Ｈｉｒｏｓｉ」

さてと、由香里がかわいそうだから急いで由香里の病室へ行こう。
俺はドアを開ける時１つ大事な事を思い出した、そう、トラップ攻撃、絶対に由香里はトラップを仕掛けてるに決まってる、俺は意を決して横開きのドアを思いっきり勢い良く開いた。
ガラガラ！
「痛！！」
は！？白と青の可愛いワンピースを着てる由香里はドアの前にいた、「痛いじゃないの！！ノックなしでいきなり入ってくるなんて反則よ！！罰金！！それと荷物全部持っていって！！」「ま、まじかよ！！」どうやら由香里はトラップを仕掛けていた途中だったらしい、しかも俺がドアを開いた時にそのトラップが由香里に直撃したのだ。しょうがねぇ、あんな大量の本を由香里に持たせるのはかわいそう

だしな。
「もう、最後の最後にトラップに引っかかってくれたっていいじゃん」と由香里は口をとんがらせて言った。
「そんな事よりトラップはずして早く俺の家に行こうぜ」と俺は言ったが、
「・・・・・・・・・・」由香里は何も言わない。
「なぁ、」
「・・・・・・・・・」黙るのも無理はないな、由香里はここが家みたいなもんなんだから、
「私、ここで生まれてここで育った・・・・・・・」「そうだよな、離れるのが辛いよな」
と俺はなぐさめた。
「私、やっぱ退院したくないなぁ～～」「でも親父さんの財産はもう底をつきたんだろ」いくらなんでも俺はそこまでできないからな、
「そうだ！！由香里！ちょっと待っててくれ！！」「え？ちょ宏！！」
俺は走ってナースステーションへ行った、「すいません！渡辺先生いますか！？」と息切れしながら尋ねた、
その時、後ろに渡辺先生が立っていた、
「何か用かね？」「あ、あのぉ～先生ならわかると思うんですけど、由香里が使っていた２１９号室をずぅ～～っと由香里が死ぬまであのままにしてほしいんです、おねがいします！！」俺は一生懸命におねがいした、「君、最初から私もその気だよ、立花くんが生まれた時から知ってるので立花くんの気持ちは十分解るよ」「じゃあいいんですか！？」「うん、いいですよ。」よかった、これで由香里と一緒に外へ出られる、「ありがとうございます！！」とお礼を言って俺はその場を去ろうとした、「立花由香里を幸せにしてあげなさい」「ハイ！！失礼します！！」俺は走って由香里の病室へ行った。
「由香里！ここはい、、、、、」「っへ、グスン、ズズーー」

由香里は泣いていた。
俺は何も言えなかった、あたりまえだ、だって俺が由香里の涙を見たのは由香里が笑いすぎて出た涙だけだ。
俺は一歩一歩由香里に近づいた、由香里は立ち上がって声を出しながら俺に抱きついた。
俺はさっきの事を言った、
「由香里、この部屋、一生このままにしてくれるんだとよ、良かったな」
俺達は見詰め合っていた、5秒ほどだがかなり長く感じた。
由香里は背伸びをした，
俺は解っていた。

キスをした。

俺達はかなり長い間唇と唇を付けていた、
そもそも俺と由香里はディープキスなどは好まないのだ。
長い長いキスは終了した、
由香里は「ありがとう！！」と言い俺の胸元に顔を押し付けて涙をポロポロと流していた。
俺は言った、「さぁ、行こう、新しい世界へ」
由香里は少し考えて「うん！行こう！」と笑顔で言った、
そして由香里は俺の目の前に来て言った、
「ねぇ！そこにある束の本ちゃんと持ってきてよ！！」「解ったよ、」
全く、わがままな女だ。
しかし、俺はこんな由香里が何よりも好きだ、
由香里はスキップしながら廊下を通って先走った。
しかし由香里は間違えて遠回りしやがった、俺は近道して1階まで降りてフロアで由香里を待っていた。

すると由香里が得意げそうな顔で来た、まだ俺に気づいてないらしい、
「ふぇ！？な、なんで！？」やっと気づいた。
俺は言った「早く行こうぜ！！」そこには俺のホーク３があるはずだ。
「うん！」と笑顔で答えてくれた。
俺達は外へでて駐車場に行った、やはり龍平に頼んでおいた通り俺のホーク３が置いてあった。
ホーク３にセルは付いてないため毎回キックしないとだめなのだ、しかし、
「エンジン掛かんねぇ～～！！」
「どうしたの？バイク平気！？」と由香里は不安そうに聞く「どうだろう、かなりかぶっちゃってるよ、」「かぶってるってどうゆう事？？」と由香里は可愛く目と口を丸にして質問したが「説明しずらいなぁ～～簡単に言えばガソリンが無駄に多くエンジンに送られる事をかぶるっていうんだけどそれ以外にも色々理由はあるよ、たとえばマフラーが詰まってたりとか」由香里は首を横に曲げて口をぽかぁ～～～んと開けていて「宏、訳わかんない」と言った、「ちょっとまってくれ今龍平に電話するから」

数分後、

ブロンブロン　ブーーーーーーーーーー、っとシフトを2、1、N、に下げてさらにかっこつけて「ブォ～ン！！」と吹かしやがった。
「あぁうるせえうるせえエンジンきれきれ！いっその事捨てちまえ」と俺は言ってドアを開けてエンジンをきった。
当然由香里は「この車かっこいいぃ～～」っと言って感激してる、
「おい、龍平、てめぇ俺のホーク３のキャブいじっただろ」
「悪ぃ～悪ぃ～、一度でも良いから宏のホーク３のキャブいじって

みたくて、、」「てめぇ〜、俺が約５ヶ月間苦労して調整したのにいたずらしやがって！！しかも５００になってるぞ！！なんでもパワーじゃダメなんだよバ〜〜カぁ〜〜」由香里は話しに入れないからおとなしく俺のバイクの三段シートに横向きで座っていた。
「龍平、マイナスドライバーと２５０番もってるか、」「あぁ、あるよ」俺は龍平のデカイＲ３４のトランクから工具箱とスペアパーツケースを出した。

数十分後、
由香里は三段シートに横向きで座っているが俺はキックをした、
ブロロロ、ブロロロロ、ブロロブォンブォンブンブルーーービュンビュン、
由香里はあまりの音のでかさにビックリして後ろへひっくり返りそうになった、
正直その時のビックリした顔は可愛かった。
しかもそれで恥ずかしそうにそっぽを向いてるところがもっと可愛い！！
あぁ〜〜懐かしいぃ、この音。残念ながら読者の皆様にはお聞かせできないがこれは最高の響きだ！！
「おい、龍平、お前罰としてこの大量の本をキズつけないで俺の家まで持って行け」「おぅ」
ガチャ、ドン。隆平はＲ３４に乗った、
ガガガガブォ〜〜ン！！ブォ〜〜〜ン！！コトコトブォ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ンブォ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ンブォ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ンブォ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜。
さて由香里、行くか。「うん！春だから暖かいね」「あぁ、そうだなぁ、ほれ、俺のヘルメットかぶっとけよ、」と言ってキャップ型のメットを由香里に渡した。
由香里はゆっくり三段シートにまたがり俺もまたがった。
実際三段シートが付いてたらシートについてるフックをつかんでれ

ば落ちる事はない。
だが由香里は俺に無駄に強くしがみついていた、
ブォンブォン！！

数分後、
途中で最近調子に載ってるブラックパールの東組みが来やがった。
由香里はかなりビビッテいる、俺は近くのコンビにで止まって由香里に言った、「なぁ、由香里、初めてのおつかいに行かないか？？」
「え！？」と由香里は反応した、「適当に美味そうなお菓子と飲み物買って来い、ほら、２千円やるから、」「え、でも早く逃げないと、」「早く行け！！」俺はなぜか由香里に怒鳴ってしまった。
ブラックパールの頭が「おぃ！！てめぇ！！調子に載ってんじゃねぇ！！」出たよ、よくあるやつ、「別にぃ～～、調子に載ってないよ」「ないよ！？先輩にむかってその口の聞き方はなんだ！！」「は！？てめえが先輩だと思ってねぇよ！！」俺は心の底からそう思っていた。
「てめぇ！！ふざけやがって！！」
ドシ！！
俺が殴られたのではない、「ッグハ！！」
俺が殴った、
しかし、相手は１０人ほどいたため俺はあっけなくボコボコにされた、
だが俺はひるまないでリーゼント頭の全身ブラックの服を着た頭を殴ってた、そのうちそいつらは俺がひるまないから逃げてしまった。
すると、コンビニの中から重そうなビニール袋を二つがんばって由香里が持ってきてる「宏ぃ～買ってき、、何よ！その傷！！」ゆかりはセリフを途中で止めて真剣に俺の怪我を心配してくれた、
「あぁ、たいした事ないよ」と俺は心配そうな顔をしたあ由香里に優しく言った、「大変よ！早く家に行って手当てしなさい！」と由香里は俺に怒りながらバイクの三段シートにまたがった、「何ぼぉ

〜〜っとしてるのよ、早くしなさい！」と由香里はさっき買ってきた袋を抱き抱えた、俺はバイクにまたがりキックした。

数分後、

やっと俺の家に着いた、由香里は「このデッカイのがあんた家なの！？」と目をでかくして俺に質問した、「あぁ、俺の家だよ、ほら家に入るぞ袋俺が持つよ」「あ、男の人が荷物を持つのは当たり前の事よ」と由香里はツンツンして俺に言った、

俺は郵便受けに入れておいたカギを出して家のロックを解除した、俺は右手でドアを全開に開いて3歩下がって左手を少し動かして由香里を中に入れた、レディーファーストってやつだよ、由香里はちょっと奥へ行って恐る恐る履いてたスニーカーシューズを脱いで歩くと同時に「お、おじゃまします」と緊張していた声だった、俺はドアを閉めて靴を脱いで由香里の横に来た、「由香里、この階はほとんど倉庫になってるんだ」と言って階段を上った、病院の階段と比べるとはるかに家の方が急だ。

俺は由香里が落ちないように後ろで上ってた、俺は由香里の右に来て俺の左手を由香里の左肩に置いて部屋を案内した、それで階段を上って三階へ行った、由香里の顔を見ると目がキラキラと輝いている、そして、俺の部屋のステッカーだらけのドアを開けた、

龍平に頼んだ由香里の本はちゃんと置いてあった。

「わぁ〜〜〜すごぉ〜〜〜〜い」と由香里ははしゃいでる、俺のフカフカベットに立ってジャンプしたりパソコンを触ったりラジコンを持ったり筋トレ道具のダンベルを足で転がしたりベンチプレスにねっころがったり色々はじめて見る物をいじっている。

しかし懐かしいもんだなぁ〜〜、3ヶ月もいないとこうも違うのかなぁ〜〜？？

由香里はこっちを笑顔で振り向いた、自分の膝までありそうな長い髪が揺れてワンピースも揺れていて俺に質問した、「ねぇ、お母さんは？？」実は俺には母親はいない、「お前と同じで母親は俺が小

さいぃ時に離婚したんだよ」と言った、その時由香里は下を見ていた、「そ、、そう、だったんだ、」と悲しそうな声で言われた。
「だから国から補助金をもらって親父の財産で暮らしてるんだ、それと時々バイトもしてるんだ」由香里はちょっと顔を赤くして「じ、じゃじゃあ二人っきりってこと??」と俺に質問した、「あぁ、そうゆう事になるな」と言った。
由香里はちょっと嬉しそうな顔だった、正直俺も嬉しい、こんなに可愛い同級生と一緒に二人っきりで暮らすなんて夢みたいだ。
ピーンポーン、家のチャイムが鳴った、俺と由香里は玄関へ言った、ガチャギィ〜〜、「ようカップルさん」「こんにちは、宏さん」と池田と森井さんが来てくれた。
池辺と森井さんは後ろで隠してた花束を由香里に渡した、「ど、どうも。」とお礼して由香里は受け取った、「おい、俺に花束はないのか?」と聞くと「だってお金がもったいないじゃん」と池辺は言った、「まぁ、あがれよ」と俺は言ったが「いや、いいよいいよお二人の素的な時間を邪魔したくないし、春休みで2週間休みだから由香里ちゃんに町案内でもしなよ」と池辺が言った。「じゃあ学校で会いましょう由香里ちゃん」と森井さんが言った、「う、うん、、、、」と由香里は答えた。
「じゃあな」と俺は言って二人は帰った。
「由香里、その花束どうする?」と聞くと「大丈夫、これくらい、花便はある??」と由香里は言ったから2つ出した、1個は玄関に置いてもう1個は俺の部屋に置いた、
「それより、宏!早くその傷の手当てしましょ!」
「大丈夫だよこれぐらい」
「ダメ」
「痛くないよ」
「ダメ」
ヤバイだめだめ攻撃が始まった、
「でも本当に痛く」

「ダメ」
「あ、だから」
「ダメ！！」
数分後、
「俺の顔は絆創膏だらけになった」
「由香里。何かやりたい事あるか??」と俺は質問した、
「う～～んじゃあ海に行きたいな」と由香里は言った、そうか「由香里は一度も海を見た事はないんだよな」「うん」「よし！じゃあ今行こうか」「うん！」と笑顔で答えてくれた、
俺達はホーク3に乗って海へ行った。
途中で由香里に「ねぇ、海って好き??」と聞かれたからうん好きだよと答えたかったのに風のせいで「うん、ふぃしはよ」と言ってしまった、当然由香里は「何！？聞こえない！！何って言ったの！？」俺は再び「うん、ふぃしはよ」と言った。
やっと海へ着いた、俺はバイクを止めてメットを置いて由香里と一緒に浜辺に言った、
「気持ち良ぃ～～～～」とくるくる回って背伸びしながら由香里は言った、「海は泳ぐだけじゃなくて散歩したりバーベキューしたりしても楽しいんだよ」と俺は言った、
由香里ははしゃぎすぎて砂の穴に足を引っ掛けて転びそうになった、が、俺が上手く支えたからギリギリ助かった。
俺達は手をつなぎながらニコニコ笑っていた、
俺と由香里は気づいたら変な所まで来てた、
そして由香里は俺を抱いた、「私、死ぬのが怖い！！」
あ、そうか、そうだよな、由香里は普通じゃないんだよな、そう、由香里は心臓の弁膜が動かなくなるのだ、
「由香里！！」と言って俺も抱いた、「私、もう宏と離れたくない！！私、絶対に死にたくない！！」由香里は涙を流していた。
俺は言った「由香里、頑張ればきっと大丈夫だ！！一緒に病気と戦おう！！」と言っても俺にできる事は一つしかない、

そう、「由香里、君が消えるその日まで、俺はお前を守ってやるからな。」
由香里は俺の顔を見た、「それ、聞いたの2回目よ」「え！？知ってたのか？？」「うん、あの時、てっきり夢だと思ったの、でもその後やっぱり夢じゃないんだなと思って」「そうか、」
由香里は涙を流しながら笑った、俺も笑った、いつの間にか俺も涙が出てきた、
俺達はベンチに座って手をつないだ。
良く考えると最初に出会った時の由香里と今の由香里は全然違う、なんと言うかそのぉ～～。
自分の気持ちを相手に伝えられるようになったり喋る量が増えたり一番俺にとって嬉しいのは、

由香里が笑顔で笑ってくれる事。。。。。。

第６章「新しい世界」（後書き）

こんにちは、
昨日は友達が僕の家に遊びに来て泊まったんですけど、「寝る場所がない！！」
まぁ僕は休みの日だと徹夜するので、
それで今日は１時間くらいしか寝てませんｗｗ
最高に頭痛いです、眠くないけど頭がぁ～～～！！
そんな事はどうでもいいんですが、
感想と評価してくれたお二人ありがとうございます！！
実は感想とかを読むとやる気がでるんですよ、
挿絵も書いて載せたいのですが実際自分は絵が激下手なのですｗｗ
旧車バイクなら書けるんですけどね、
あと８６なら書けます、
最近小説が将来の仕事に繋がればいいなぁ～～と思ったりなんかしてます（無理！？）
これからどんどん書き続けるので読者の皆様！！
楽しみにしててください！！
それでは。

第7章「スクールライフ」

「こら！！宏！！早く起きろ！！」
春休みも早々終わってしまった、
「まだ眠いぃ～～～～」
毎日由香里と一緒にいた、
「起きないとダメ！！」
「由香里一人で行けよぉ～～」
由香里ははりきってる、
「何わがまま言ってるの！！早く起きなさい！！」
「うわ！！おい！なんて事をするんだよ！！」
そこにはパジャマがものすごく似合う由香里がいた、
「宏が早く起きないからよ！！ほら！早く顔洗って飯食って歯磨いて着替えて学校に行くわよ！！」
そう、今日は由香里にとって始めての学校だ、「ほら！！ぼぉ～っとしてないで早く2階に降りろ！！」「あぁ～～わかったわかった」
朝から大声出されてしかもおでこに氷を置くなんて女子中学生がやる事か？？
由香里なら何でもやるけどそんな女が家にいたら絶対に迷惑だよ。
何でもできる由香里だが1つ苦手な事がある。

「何、この黒い固まりは、」「オムライスよ、見てわかんない！？」
これがオムライスか？「あのぉ～オムライスって黄色だよね？？」
「そ、そうよ、そそんな事よりはや早く食いなさいよ」ヤバイ！これ食ったら絶対死ぬ、「ああ、今日は体育の授業があるからいらないよ」よし！これで完璧！！
「ダメ」
あ、由香里のダメダメが出ちまった、、、、
「ほら、今日健康診断もあるだろ？？」

「ダメ」
どうする！？俺！！
「あぁ～まだ退院したばっかだからあまり美味しい物は食べないほうがいいんだよ」
「ダメ」
そうだ！！これが一番良い
「あぁ～～腹が痛いぃ～～」
フフフ、由香里は心配性だからこれで俺は救われたな、
「ダメ」
俺は泣きながらまずいオムライスを食べている、「上手いよ上手いよぉ～～由香里ぃ～～」
「そうよ美味いに決まってるのよ！私のお料理が食べれるだけでも嬉しいと思いなさいよ、」
「はいぃ～～ご主人様ぁ～～」これは確信を持って言える事だがこの黒いオムライスより賞味期限切れでゴミ箱行きになったコンビニの弁当の方がよっぽど美味い、
でも、由香里が作ると何故か美味しい、
そんな訳ないかぁ～～～、
ようやく食い終わった、
「由香里、もうそろそろ着替えろよ」「言われなくても解ってるわよ、」
俺と由香里は登校中、
これから俺と由香里は同じ学校に通い同じ学年で同じクラスで隣の席でスクールライフをおくるのだ。
本来なら俺と由香里は3年生なのだが由香里は病院で一人で勉強しているけど2年生だ、俺は元々バカだし病院で勉強しなかったから俺も2年生だ、
じゃあなぜ由香里は勉強してるのに3年生じゃないのか？と聞かれると言うまでもないが由香里は「宏と同じが良いの！！」とわがままを言うからしかたなく3年生から2年生になったのだ、もったい

ない事をする女だ。
もし学校で由香里に何かあったら俺が一番良く知ってるから校長に話して席は隣同士になった。
実は俺は由香里といつでも一緒だと考えると自然と笑みが現れしてしまう。
「気持ち悪い」
「え！？」
「何さっきから私見てニヤニヤしてるの」
くそ、やはり顔に出てしまったか、
「ねぇ、もし私が3年生だったらどう思う？」と由香里は質問した、
「まぁそりゃしかたないけど残念だと思うよ」と俺は言った、
「それだけ？？」なんか嫌な予感「あ、う、ほ、他にも色々思う事はあるけどぉ～」「それだけ！？ねぇ！私はあんたのために2年生でいいって言ったんだよ！」「あいあい、どうもありがとうございました」　「もっと丁寧に！！」また始まったよこいつのツンツンモードが、
ま、これはちゃんと礼を言うべきだな。
「ありがとよ、由香里」「え！？」「ん、だからありがとな」「わ、わか解ってるならそれで良いのよ」うん、由香里はいつものようにツンツンして良い感じだな。
「ねぇ、なんでカバン持ってないの？？」「ん、だってかばん邪魔じゃん」「変なの」
俺達は適当な事を話しながら学校へ行った。
すれ違う人皆が俺達に挨拶をする、
そうだよなこんな美人がいれば挨拶するに決まってるよな。
だがお前ら！こいつの性格を知ったら絶対ショックうけるぞ！！
「宏、さっきからじろじろ見てくるけど何なの？？」「あぁ、み、皆転校生とかが来ると接したくなるんだと思うよ」「あっそ、」
俺達は二年四組。
由香里は職員室へ行く、俺は教室へ行く。「バイバイ、宏」と由香

里が寂しそうに言う、「おぅ、じゃ、またあとで、」俺は途中で3年の学級委員長とすれ違った、「ちょっと君！」とそいつは俺に言った「んぁ！？」俺は返事した、「上履きをスリッパみたいにかかとを踏むのと腰パンと第2ボタン外しと頭に被ってる黒いバンダナとブレザーにある龍の刺繍を全て直しなさい！！」

「うっせぇ！！」俺はそう言ってB棟に入って階段を上り2階にある2ー4に入った、

ガラガラー、

ゴチャゴチャうるさくおしゃべりしてる奴らは黙り込んだ。

端っこの方で「ねぇ、あの人って青山先輩が言ってた喧嘩上等の人だよね？」「あたりまえよ、見た目からしてそうよ」とか言ってる奴もいるし、「おい、あいつが留年した奴だろ？？」とかその他色々言ってる奴がいる。

まぁ中には「なぁ、あの人と仲良くなれば俺達はかつあげされないだろ」とか「私、あの人に守ってもらいたいなぁ」とか言ってる奴もいた。

俺は先生に言われた席に座った、前の席の女子は「あのぉ～～宏さんですか？」と俺に質問した、「あぁ」「あのぉ、前にあった、学校を荒らす事件の犯人なんですか？？」「あぁ、だから何だよ」と俺は言った、「あ、あのぉ～それじゃあお願いがあるんですけど」お願い？一体なんだろう「内容は？」「最近別の学校の3年にうちの学校の生徒がいじめられて暴力振られたりかつあげされたり荷物を持っていかれたりそのほか色々やられてるんです！」「じゃあの学校の奴らを俺がやればいいんだな？」「ハイ、」「その学校の頭は誰だ、」

「加藤光です」

聞いた事ねぇなぁ、　「どこの学校だ？」「三浦高校です」「わかった、今度俺が行ってけり付けてくる」「ありがとうございます！！」

もしかして学校側の俺のイメージってヤンキーとかそこら辺なのか？

とそこで先公がきた、「おはよう、」あ！！
くそ！この先公去年と同じじゃねえかよ！！
ちなみに名前は岡辺だ。
キ～～ンコ～～ンカ～～ンコ～～ン
チャイムは鳴った、
「えぇ～今日は皆が初めて見る人が二人います、一人は去年もこのクラスにいたから見た事あるかもしれない、一番奥の窓際にいるのが留年した宏くんです、」皆はこっちを見た、「次に、今日入学した立花由香里ちゃんです、」ガラガラー、由香里は中へ
皆は「うぉ～～～～すっげぇ美人じゃん！！」とか「結婚してぇ～～とか」「私より美人！！」とか「ブレザーじゃなくてセーラー服着てほしいなぁ～、」とか言ってる奴がいる。
たしかに俺の学校では男子も女子もブレザーだ、
全く！！由香里とブレザーは由香里の方が美人すぎて似合わない！
「あ、あの、え、えっとぉ、、あ、ここれからよろしくお願いします、」由香里はカタコト語で言った、
俺の前の席の女子は俺に質問した、「ねぇ、あの子と付き合ってるんでしょ？？」「は！？なな何だよいきなり、」その時、由香里は俺の事をにらんで口をもがもがうごかしてた、口の動きをよーーく見ると、、、、
殺す殺す殺す殺すと言っている。
やばい、どうしよう、よし！
「俺があんな奴と付き合ってるわけないじゃん、ツンツンだしわがままだしめちゃくちゃだし寝てる時はよだれたらすし料理へただし俺の服のたたみ方は適当だしすぐみかんなげるししかけたトラップに自分で引っかかるし、、ってあれ？」俺、こんな事言ったらまずいのかな！？
ななな何かゆ由香里のほ、ほっぺがけ痙攣してるぞ、、、、、
その時男子が言った、
「もしかして宏さんと由香里さんは付き合ってる！？」お、おい！

！てめぇ！！ふざけんな！！
由香里はますます怒ってる、、、、、
岡辺は「お前らうるさいぞ、由香里さん、じゃあ宏君の隣に座って
ください」と言った、
ややややヤバイよ！！
こここ殺される！！
だだ誰か助けて！！
由香里はこっちへゆっくり歩いてる、
由香里は席へ座った、
ん！？何か聞こえるぞ、
「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺
す殺す」
俺は怖くて手がかなり震えている、
「な、なぁ由香里、今日のオムライスすっげぇ〜〜上手かったぞ！
！」と俺は言った、
由香里は「わかった、じゃあ弁当も作ったから食べて」と言いやが
った。
「くそ、いまいましい」
その日の休憩時間、
「ねぇ、由香里さんは宏さんと付き合ってるの？？」と女子が由香
里に聞いてた、
「ふぇ！？あ、だ、つ付き合ってないわよ」おいおい、そんなに焦
って言ったらばればれだぞ、
その時「うぃぃぃぃ〜〜っす」と龍平が来た、
俺達の所に来て「よぅ、ラブラブカップルさん」と嫌味のように言
ってきやがった。
「え！？」と由香里は言った、
クラスの奴らは「じゃあやっぱ付き合ってるんだぁ〜〜」と言って
やがる。
俺はごまかそうとしたがもう手遅れだ、廊下ではすでに「ねぇ、4

組に来たキレイな人と留年した人って付き合ってるんだって！！」
と話題になってやがる、
全く！なんで皆はこうゆうのが好きなんだろう、
由香里は「宏、行こう」と言って俺の手をひっぱった。
「おい由香里、何所に行くんだよ」「いいから、」由香里は立ち入り禁止の階段を上って行った、「ちょ、ここ入って平気なのかよ」
「ダメでしょ、でも通らないと行けれない」と由香里は言った。
「着いた！」ん？ここは屋上の入り口？？「なぁ、ここに来たかったのか？？」と聞くと「うん、屋上に行ってみたかったの」と言った、
ここは掃除がなくて汚いためドアはなかなか開かない、
俺はイライラしてドアを蹴っぱぐったらドアが外れてしまった、
「あぁ〜〜あ、私知らないよぉ〜〜」っと由香里は目を細くして言った。
俺は急いでドアを戻した、が、「由香里？」由香里がいない、と思ったらもう屋上へ出ていた、
「な、なぁ由香里、」「ん？何よ？何か文句でもあんの？？」「あぁ、あの、一時間目どうだった？？」と俺は聞いた、「うん、まぁ普通かな」と由香里は答えた。
「学校楽しいか？？」
「・・・・・・・・・・・・・・微妙」
そうだよな、「学校ってのはそうゆうもんなんだよ」と俺は言った、
俺と由香里は柵の方へ行った、
由香里はポケットに手を入れて何かを出した、「宏、食べる？みかん、」本当は学校に食い物は持ち込み禁止だがここなら誰も来ない。
「あぁ、食べたいなぁ」由香里は小さな可愛い手で硬いみかんの皮を剥いている、「俺が剥いてやろうか？」と聞くと「大丈夫よ、こんくらい簡単よ」と言って皮を剥き終わった、
「ハイ、」と言い俺にみかんの3分の1を渡してくれた、
由香里は「このみかんは美味しいんだよ」と言いながら白い部分を

取っている、
俺も美味しく食べたいから白い部分を取ってる、
「男の子って白い部分も食べちゃうのかと思ってた、もしかして宏だけ？」と由香里は言った、
たしかに皆白い部分も食べてる、「あぁ、ほとんどの人は白いのも食べるよ、女子も食べる人いるよ」と俺は言った、
「へぇ～～、女の子も食べるんだぁ～～意外だなぁ～」と言っている。
由香里はみかんを一個口に入れて「ねぇ、宏は悪なのにタバコとか吸わないの？？」俺って悪しなのか？？「あぁ、タバコや薬は寿命が減るし体に毒だから吸わないよ、寿命は大事だろ？」と言った、
「うん、宏はえらいえらいえらい」と言いながら頭をなでなでしてくれた、俺は嬉しかった。
「もうそろそろチャイム鳴るから教室に戻ろうぜ」と俺は言って歩き始めた、「うん」と由香里は言って手をつないだ。
教室に戻ると早速
「こんにちはカップルさん」とか色々言われた、
由香里と俺は席に座ったが由香里の顔は赤くなってる。
「では3時間目の数学を始めます、」と言いながら先公が入ってきた。

数分後、
この先公はとてもめんどくさがりだからしょっちゅうプリントを配って仕事をサボっている。
「だ～～か～～ら～～これじゃなくてこうでしょ！！」「あぁ、これは2．5で良いのか？？」　「だ！か！ら！！違うって言ってるでしょ！！」
俺は由香里に教えてもらってるが全く集中できな、なぜなら由香里が可愛いからだ、
いつまでもこんな時間が続いてほしい。「ちょっと！人の話し聞い

てるの！？」「あ、あぁ、」

昼飯の時間、

「ほら、宏、弁当！」あ！ヤバイ！また黒い物体食べないとダメなのか？？「あぁ、あありがとう」由香里はちょっと恥ずかしそうだった、

俺は恐る恐る弁当箱のフタを開けた、

「うぉ～～すっげぇ！！」いつもと違って今回は最高だ！！

由香里はずぅ～～～～っと俺の事を見ている、

「いただきます」

俺はキレイな玉子焼きを箸で挟んで口の中へ入れた、

「うまい！！美味すぎる！！」由香里は喜んでいる。

「何でこんなに美味しいんだ！」俺は弁当箱を左手で持ってガツガツ食べた、

由香里は「ほら、もっとお食べ、」と俺を犬みたいに頭をなでなでした。

普通はムカ！とくるはずなのに由香里にやられると逆に嬉しい、

由香里も自分の弁当を食べ始めた。

俺はあっという間に完食した、

「由香里、美味しい弁当ありがとう」と言って弁当箱を由香里に渡した、

由香里は顔を赤くして「あだ、き、昨日の晩御飯の残りだけどね」と言うが良く考えると昨日の夜は玉子焼きや手作り春巻きなどは出ていなかった、

よく考えたら由香里に買ってあげた目覚まし時計のタイマーは5時になってたような気がする、

そう、由香里は俺のために朝早く起きて弁当を作ってくれたんだ。

放課後の下校中、

俺と由香里はまた不動山に登る事にした、

「なぁ、由香里、今日は暖かくてしてて気持ちいいな」と俺は何気なく言った、「うん、ポカポカして良いね」と由香里は言った、
俺はカバンは持ってないが由香里にはプレイボーイスポーツバッグブラックを買ってやった、あのプレイボーイだぞ！！しかも手ひもの渕はピンクだし裏地もピンクだ。
「おい、由香里ぃそれ高かったんだから大事に使えよ」値段は６００円位だった、
「解ってるよ、」と笑顔で答えた、
「なぁ由香里、１つ聞いていいか??」「何?」
「何でこいつらがいるんだ！！」そう、俺と由香里だけでなく龍平や池辺や森井さんや古泉も一緒に来てるのだ！！
「いいじゃん」と由香里は言う、
「そうだよ」と龍平、
「うんうん」と森井さん
「いいじゃん」と池辺
「僕が一緒の方がよろしいかと、」
「全然よくねぇよぉ、」
まったく、せっかく俺と由香里だけで楽しもうと思ったのに、、、、俺達は適当な事を話して頂上までたどり着いた。
俺は自販機でお茶を２本買って一本由香里にあげた、「ほらよ、由香里、」
「何よ、これ」ん！?「お茶だけど、」「炭酸ジュースにしてよ！」はぁ～なんてわがままな女なんだ。「解ったよ、」と言って俺は炭酸ジュースを買って由香里に渡した。
俺達は小さい展望台に上った、
「ここに来るの懐かしいなぁ～」と龍平は呟いた、「小学６年に来た祭り以来だよねぇ」と森井さんは言った、「うん、懐かしいねぇ～」と池辺は言った、
「あの日の宏はマジでおかしかったなぁ」と龍平は言った、「は?俺何かやったっけ?」と俺は言った、由香里は興味深々に「何かあ

ったの？」と聞いた、
龍平は言った、「5発2百円射撃で小さい女の子がいてさぁ～その子がどうしても欲しい物があったらしくてそこを通りかかった時に宏が、どれ、お兄さんが取ってやるよって言ってやってみたんだが取れなくて何度も何度も挑戦して結局２０００円ぐらい使ってやっとの思いでとったんだけどもうその子はどこかに行っちゃったんだよぉ～それで宏は自分にムカついて自販機を蹴っぱぐったんだ、そしたら警報アラームが鳴ってさぁ～皆が集まってきて宏メッチャ顔赤くして逃げってったんだ。」あぁ、そんなような事あったなぁ～～「それで僕が宏の替わりに祭りの責任者に謝ったんですよ」と古泉は言った、「へへへ、そんな事あったのぉ～～」と由香里は笑いながら言った、「他にもまだまだあるわよ」と森井さんが言った、「おじさんがすごい熱い甘酒を皆に配ってたんだけどそれを宏は熱い事に気づかず一気飲みしたらもう宏はパニックになって自然の飲める水が溜まってる石の所に顔を突っ込んでたんだよぉ～」「あれは本当に死ぬかと思ったんだぞ」と俺は言った、「宏バカじゃん」とまた由香里は笑って言った、「まだ山ほどあるよ」と池辺は言った、「ど真ん中でうんこ座りしてる5人ぐらいの中坊のヤンキーがいてさぁ～宏はそいつらが気にくわなかったらしくてそいつらの所に行って、てめぇら中坊のくせして調子乗ってんじゃねぇ！って言ったんだ、それで1対5で喧嘩して負けるかと思ったら一度目を閉じて3秒ぐらいたったらいきなり強くなってさぁ～そいつら全員ぶっ飛ばして焼きそばのおっちゃんが止めに入って間違えてそのおっちゃんまでボコボコにしちゃったんだよ」あぁ、あれは申し訳ないと思っているよ、「だってムカついてとにかく全員ボコボコにしたかったから間違えたんだよ」と俺は言った、由香里は笑いながら「もぅ、宏は何でも力で解決しようと思っちゃダメだよ」と言った、「力じゃないよ！根性と度胸だよ、」と俺は言った、「そうそう、僕達でどぶ板通りに行った時なんだけど」と古泉は言った、「歩いてる時に少し年上の白人が肩をぶつけてきてそれにムカついて、く

そ！日本の怖さを教えてやる！！と言ってそいつの背中に蹴りを入れて、ｆｕｃｋ　ｙｏｕ！！って言ったんだ、そしたらその白人は被ってた帽子を地面に叩きつけて宏を殴ったんだ、それで宏はそいつの胸座をつかんで、Ｄｏｎ'ｔ　ｆｕｃｋ　ｗｉｔｈ　ｍｅって言って殴ったんだ、その白人は、ｄｏ　ｙｏｕ　ｗａｎｅ　ｆａｃｋｉｎｇ　ｄｉｙ！！って言って、ＮＯ！Ｉ　ｗｉｌｌ　ｋｉｌｌ　ｙｏｕ！！、と答えて白人を殴ったんだ、そんな事を１０分くらい続けていたんだ、そしたら恐そうな黒人が喧嘩を止めてラップを歌い始めたんだ、それにつられて白人と宏は肩を組んで順番順番で超早い歌を歌ってたんだ、」　「本当に宏はこの世で一番のバカね！」と由香里は言った、「で、何て歌ったの？？」と由香里は古泉に質問するが、「俺達にはさっぱり解らなかった、なぁ、宏、何て歌ったんだ？？」と古泉は言った、

「俺達は世界最強！俺達にかなう者はいない！俺達は平和を望んでる！俺達は人気者だ！　俺達は最高コンビ！！数えきれないほどの数の金と女も寄ってくる！！１０、１０、１０、の女！！　お調子者のマザーファッカーは俺達が懲らしめる！そいつらのケツを蹴ったら多分ミートボールが出てくるぞ！お前ら格好つけて葉っぱ吸ってんじゃねえよ吸うんだったらママのお乳でも吸ってろ！！　そう、俺達はＤ１２！！」ってその場の自作の歌を歌ってたんだよ」

由香里は目を細めて「何！それ、歌じゃなくてただの自慢と悪口じゃん」と言って「そんな歌歌えるんなら英語の授業もちゃんと真面目にやりなさいよ、」と俺に言ってデコピンしやがった「痛ッ！」でも面倒なんだよなぁ～～、

龍平は言った、「でも、宏は一度人の命を救ったんだよなぁ～～」

あ！バカ！それは絶対に言うな！！

「え！？このバカが人を救ったの！？」と由香里は目を大きく開いて言った、

「あぁ、宏のやつ、命がけで、、、、」「おい！！それは絶対に言うな！！」俺は必死だった、

「何だよ！いい話しだからいいじゃんか、」と龍平は言った、「絶対に言うな！誰にも言うな！由香里にも絶対に言うな！！」
俺はマジで必死だった、
「あぁ、解った解った、」と龍平は言った、
「えぇ～～、教えてよぉ」と由香里は言うがこれだけは絶対に教えたくない、
「3年前、宏は病院の前を通った時に屋上で自殺し」「だぁ～～～～～言うなぁ～～～～バカぁ～～～～～」俺はごまかそうとしたが少し龍平は言ってしまった、
由香里の足が微妙に震えていた。
俺は慌てて「なぁ、何か腹減らねぇか？？」と言った、
「そうだねぇ～どうする？」と森井さんは言った、
古泉が「お菓子だったら4袋ぐらい持って来てますよ」と言った、
「ちゃっかりしてるなぁ～～」と俺は言った、
「じゃあ砲台山に下りて休憩所で食べるか、」と俺は言った、
皆は賛成してくれた、
下りてる途中に由香里が言った、「ねぇ、この山ってなんで不動山って言うの？？」
俺は答えた、「あぁ、この山は武山、砲台山、三浦富士の三つで分かれてるんだ、それで山頂に寺みたいなのがあっただろ？それが不動って名前だから俺達は全部の山合わせて不動山と言ってるんだ。」
「へぇ～～」と由香里は言った、

数分後、
俺達は砲台山へついた、
由香里中心に俺以外の奴はベンチに座った、「おい、俺の座るところがないじゃんか」と俺は言った、
「宏はそこでヤンキー座りでもしてろ」と龍平は言いやがった、
しかたなく俺は皆の前でうんこ座りをした。
早速、古泉はポテチを開けた、俺は一枚取って食べた、古泉も一枚

取って食べた、森井さんは1枚取って食べた、池辺は3枚取って食べた、龍平は6枚ほど取りやがった！！
由香里は小さいのを一枚取った、皆は一口で食べてるが由香里は一枚を少しずつ食べている。
皆で食べてるし龍平が取りすぎたためあっという間に3袋完食した、
「ん、ってか！俺と由香里は全然食べてねぇぞ、」と俺は龍平に言った、
「まぁサンロールに行ってパンでも買って食えよ」と龍平は答えた、
「しょうがない、皆下りるぞ、」
俺達は山を下りた。

数分後、
俺達はサンロールへ行った、池辺は言った「ここは学校の目の前だから良いよなぁ～」
そう、ここは俺達が通ってる竹やぶ中学校の目の前なのだ。
俺達は狭い店に入った、「なぁ、何食う？？」と俺は聞いた、「じゃあ俺はカレーパン」「俺はチョココロネ」「僕は食パン」「私はメロンパン」龍平と池辺と古泉と森井さんは言った、
「おい、俺はお前らに質問してねぇぞ！由香里に質問したんだ！」と俺は言った、「由香里、何がいい？」と俺は質問した、
「みかんパン」
あ！？
今なんと？？
「み？か？ん？？」
「そう、みかんパン」「あぁ、みかんパンはないよ、みかんだけならあるけど」「じゃあみかんだけでいい」と由香里は言う。
俺はおじさんに「オススメのパン1つとみかんを2つください」と言った、「あいよ」とおじさんは答える。
おじさんは丁寧に紙袋にパンを入れて俺に渡した、それでみかん2つを由香里に渡した、

この店員さんはちゃんとわかってるのか、「じゃあみかんはサービスでタダで良いよ、パンは１２０円ね」おじさんはサービスをしてくれた、
俺は１２０円を渡して外に出た。
最後に出た森井さんと龍平は何か話してた。
俺は「なぁ、どこ行く？」と聞いたが「あぁ、俺達は用事があるから帰るよ、宏と由香里二人でいちゃいちゃしてな」と龍平が言った、やはり俺と由香里は付き合ってるのか、そうだよなあんなに病院で仲良くしてキスもして同居して毎日黒い物体を食わされてる俺は由香里と付き合ってるのか。
龍平達は帰った。
俺と由香里はその場へ残された。
「どうする？家に帰るか？由香里、」
「うん」と答えた。
俺達は帰る途中にこんな事を話した、
「ねぇ、宏ぃ」「何？」「もし私と宏が会わなかったら今ごろどうなってたと思う？？」あぁ、考えるだけで胸がゾっとする。「多分俺は普通の中学生になってると思うよ、」「そう、、、、」由香里は悲しそうな声で答えた。
「じゃあそしたら私は今頃どぶ川の近くの橋の下で静かに死んでるんだね」となぜか笑顔で言いやがった。
俺はその場で由香里を抱きしめた、
俺はパンを落とした、
由香里もみかんを落とした、
「そんな寂しい事嘘でも言うなよ、」
「だって私、バカな宏が好きなんだもん、」
由香里は背伸びしてキスをした。

翌日、

俺と由香里は学校へ行った。
「えぇ～～、今日は転校生が来ている」と先公は言った、
「どうぞ、お入りください」
ガラガラー、
「はじめまして！中里美里です！！」
えらい美少女がそこにいた。

第7章「スクールライフ」（後書き）

読者の皆様こんにちは、
やっと第7章書き終わりましたぁ～。
実に現在の時刻は午前7時３２分です。
今から学校です、、、、
眠いです、、、、
それはさておき評価と感想をくれた読者の方々、ありがとうございます！！
やっぱり感想を頂くと嬉しいです！！やる気がでます！！
さて皆さんここで問題です。
中里美里（なかざとみのり）ちゃんの正体は次のうちどれでしょう。
1、ＳＦ的な悪役、
2、由香里の恋のライバル、
3、脇役、
わかりますよねｗｗ
物語で登場する不動山の事なんですが実際自分でもあまり理解してません、ごめんなさい。
僕の物語を手伝ってくれる友達が1人います、
やはり挿絵は書ける人いないので自分で書こうと思ってます、
でも多分無理だと思いますけど、、、、、
さてさて、そのうち特別付録を作ろうと思ってます、
内容は物語で登場した病院や学校や店などの写真を撮ってきて地図にしたいと計画中です。
。。。。。。。。。。。おっと！
危うく寝るところでした、
これから学校なのでこれにて後書きは終了します。
さよならぁ～～。

第8章「由香里と美里さんと時々不動山」

えらい美人がそこにいた。
俺は心の底からこう思っていた、
うわ！！すっげぇ美人じゃん！！
顔は由香里の方が上だけど性格の良さは絶対にあの人の方が上だ！！
うん、絶対上。
上と言ったら上だ、
もし俺があの人と付き合ったら確実に結婚だ！！それで子供も生んで幸せなか
バシッ！！「痛ッ！！」「何すんだよ由香里！」「あんたが変な事考えてるからよ」ん！？もしかしてばれてたのか！？「な、何を言ってるんだよ、俺は何も考えてないぞ、」「絶対に考えてた！だって顔がニヤけてたもん、」くそ！顔に出てたか！！
ん！？でも俺とあの人が結婚したら由香里はどうなるんだ？？
「何よ、じろじろ見ないでくれる！」と由香里は言う、
そうだ、俺には由香里がいる！この自慢の由香里がいる！！
「俺は由香里しかいない！」「はぁ！？何よ！いきなり！！」「あ、いや、べ別になにもないよ、」
「こら！そこ！ごちゃごちゃ喋ってるんじゃねぇ！！」と岡辺は言った、
由香里は先公を見ながら俺の方を指差した、「え？俺？？」岡部は腕組みをして言った「宏ぃ！お前は頭が悪いんだからまともに話しを聞いてろよ！！」
「痛ッ！！」今度は先公にばれないように由香里は足を蹴りやがった！！
「下手な芝居をしてないで中里美里さんにあいさつをしろ！」と岡部は怒鳴った、
俺は「あ、あぁ～これからよろしく」と中里美里さんに言った、

中里美里さんは「ハ、ハイ」と笑顔で答えてくれた、
俺は真剣に考えた、
顔は由香里の方が上、
背は美里さんの方が上、
声の良さは美里さんの方方が上、
性格も絶対美里さんの方が上、
胸も美里さんの方が上！
うむ、解ってきたぞ、俺は由香里を見捨てて美里さんに接近しよう！！
ドシ！！「痛ッ！！」また由香里に蹴られた、
でも、正直言って俺は由香里を心の底から愛してる、誰よりも愛してる、しかも病気を抱えてるのに見捨てる大バカ者がどこにいるんだ！！
そうだ！！俺は約束したのだ！！由香里を死ぬまで守り続ける！！
美里さんは右から3番目、前から2番目に用意してある席までゆっくり歩いて座った。
美里さんの隣の男子は「始めまして、これからよろしくね」と言った、顔を男子に向けて「ハイ」と笑顔で言った、
当然その男子はウハウハだった。
由香里は腕組みをしながらほっぺをふくらましていた、はっきり言ってこうゆう由香里が俺は大好きだ。
ドシ！！「痛ッ！！」

一時間目、国語、

由香里は人気者だったが。
「このように五七五を作ってください、タイトルは自由です」と国語の担任が言った、
昨日までは「由香里ちゃん、幸せにする、俺達が」とか「結婚して、

由香里ちゃんだけ、必要だ」とか言ってたのに今ではこうだ！！
「美里ちゃん、笑った笑顔は、素適だよ」と。
由香里は激しく貧乏ゆすりをしている、その下に顔をやったら絶対にこう言うだろう。

ひでぶ！！

2時間目、英語、
美里さんは言った、
「Hello, my neme is Daisuke. I wa nt to have my own Japanese res taurant in New York. Do you Kn ow why? Well, I really like th e taste of Japanese food. Also it's very healthy, so it's po pular in America.
Japanese cooking is difficult.
I have many things to learn.
But I'll do my best. Please co me to New York and try my food some day.
Thank you.」
「うぉ～～」「すげぇ～～」「天才だぁ～～」と皆は言った。
由香里はと言うと、、、、
「あんなの簡単よ、サルでもできるわ、」と言った、
ん？サルって喋れるの？？
「あぁ、今のが簡単って事は由香里のレベルは低いって事だね」と俺は冗談で言った
「痛ッ！！」
由香里に俺の足をおもいっきりかかとで踏んづけられた、そして由

香里は腕組みをして可愛いほっぺをふくらまして「むぅ」と言った、
絶対可愛い！！
写真を撮っておきたかった。
「でわ、次は宏が読んでください」と先公は言いやがった！
「え！？あ、え、えぇ～っと、あ、　Ｉ　ｗｉｌｌ　ｋｉｌｌ　ｙｏｕ　ｔｏｍｏｒｒｏｗ　ａｎｄ　ｆｕｃｋ！！」と関係ない事を言った、
「バカ！何言ってんのよ！」と由香里は俺に言った、「だ、だって解んないんだもん、」と俺、「解んなかったらわかりませんって言いなさいよ、」「わぁったよ」と俺は言った、
「わかりません！」と先公に言って着席した。
皆は笑っていた、

休憩時間、
俺と由香里は屋上へ行った。
「何やってんのあんた！」と由香里に怒鳴られた、「だ、だって本当に解んなかったんだよ、」と俺は言った、
「普段から勉強しないからああやってなるのよ！」と柵の方に行きながら言った。
「・・・・・・・・ごめん」俺は謝った、「な、な何謝ってるのよ、」と由香里は言った、「だ、だからそのぉ～勉強しないでごめん、、、、これから少しずつ勉強がんばるから許してくれ！」と俺は頭を下げた、
「あだ、だ誰も謝れなんか言ってないわよ、」と由香里は言ってくれた、「本当に！？」「あたりまえよ、それよりみかん食べましょ」と由香里は笑顔で言ってポケットからみかんを出した、
由香里はみかんの皮を剥いた、
「ハイ」と笑顔で言ってみかんの3分の1をくれた、
俺達は昨日みたいに白い部分を取って一緒に仲良く食べた。
さて、「そろそろ行くか？」と俺は歩きながら質問した、

ガシ！「んなぁ！」
由香里は俺のブレザーの首の部分を片手で思いっきりひっぱりやがった、
「な、なんだよ」「・・・・・・・」「どうしたんだ？」「・・・・・・・・」「何かあったのか？」
「・・・・・・・宏、美里の事気になるんでしょ、、、、」と俺の靴を見ながら寂しそうな声で言った。
「そんな訳ないだろ、」「本当に？」「あぁ本当だ、神に誓っても良いぞ！」「本当に？」「あぁ本当だよ」「嘘ついたら？」「俺の心臓と由香里の心臓を交換してやるよ」

「バカ！それじゃあ宏がいなくなるじゃん！！」と由香里は涙目で叫んだ、「だからぁ～、俺は嘘をつかないから大丈夫だよ。」と俺は言ってやった、
「じゃあ約束よ！」「あぁ、んなくだらない事話してないで教室に戻るぞ、」と俺は笑顔で言いながら1度由香里の頭に手を載せた、
「うん」と笑顔で答える由香里、、、、

3時間目、技術、
技術は技術室へ移動して授業を受けるのだ。
俺と由香里は移動しているあいだ手をつないでいた、
「由香里の手って小さくて可愛いな」と俺は何気なく言った、「宏の手がデカイからじゃない？？」「俺の手ってそんなにデカイか？？」「うん、デカイ、」「由香里の手が小さいからでかく見えるだけでしょ」「宏の方がデカイ、」「そうか？」「うん、絶対にデカイ」
俺と由香里はどうでも良いような事を話してた、
俺と由香里はニコニコしながら歩いてた、
その時！
「よう、ラブラブカップルさん」とまた嫌味のように背後から龍平

が言った、
由香里は恥ずかしそうに握ってた手を離した、
その時！！
「キャア！！」ドサ！！
後ろで女子の悲鳴と共に鈍い音が聞こえた、
俺と由香里と龍平はその音を探るべく振り向いた。
そこにいたのは美里さんだった、周りには教科書や技術の道具が散らばってる。
俺は「大丈夫！？」と言って美里さんを立たせた、それで落ちた物を拾った、
「あ、ありがとうございます！！」と頭を下げてくれた、「い、いえいえ、お礼なんてしなくていいんですよ、それより怪我はしてないですか？」美里さんは自分の腕を見たが怪我はない、次に足を見たがそこには小さな傷があった。
「美里さん！！足怪我してますよ！！一緒に保健室に行きましょう！！」と俺は大げさに言ってしまった、
俺や男子が怪我しても大したことないがどんなに軽い怪我でも女性の人だとかなり心配してしまう。
「ちょっと！宏！大した事ないんだから早く行くわよ」と由香里は言うがこんな状況で、
じゃあ怪我は平気そうだから先に行くね、なんて言える訳がない！！
「こんなすり傷は大丈夫です」と美里さんは言うが　俺は彼女の腕を優しくつかんで保健室へ向かった、
「先生！！この方が足を怪我したので手当てしてください！！」と俺は大げさに言った。
「あらあら、すりむいたのねぇ～今マキロンで消毒しますね」と保健室の先生が言った、
美里さんは痛そうな顔だった、
先生はマキロンで消毒した後絆創膏を貼った。
「ありがとうございます」と美里さんは先生に言った、「いえいえ、

生徒を守るのが好きでやってるので、」と笑顔で先生は答えた、
俺は「じゃあ美里さん、技術室に行きましょうか」と俺は言って手をかした。
「あ、ど、どうもです」と可愛い声で言った、
俺と美里さんは廊下を歩いてる時に大変な事を思い出した！！
それは本当に大変な事！！
地獄行きといっても過言ではない！！
そう、
由香里をほったらかしにしてたのだ！！
「あ、あのぉ～どうもありがとうございました！」と美里さんは俺に言ってくれた、
「いえいえ、当然の事をしただけですよ」と俺は言った、
「えぇ～～っとそのぉ～～、お友達は大丈夫なんですか？？」と美里さんは質問してきたが、断然大丈夫じゃない！！
「あ、あぁ～大丈夫ですよ」と俺は言っておいた。
だが、俺と美里さんが技術室へ着いたら由香里はプンプンに怒ってた！！
とりあえず先公に訳を話して席へ着いた、
「ごめんごめん由香里ぃ」と言ったが、
「・・・・・・・・・・」
「怪我は大した事ないんだけどかわいそうだからさぁ～」
「・・・・・・・・・・」
「あと転校生だから余計」
「・・・・・・・・・・」
「本当にごめんな」
「・・・・・・・・・・」
「怒ってるのか？？」
「・・・・・・・・・・うん」
くそ！！どうしよう！！
「あ、ご、ごめん」

「・・・・・・ひどい」
「本当にごめん！！だって由香里が転んでそのまましかとされたらどう思う！？」と俺は言い訳を言ってしまった、
「そんなの関係ない」と由香里は超低音で言った、
「本当にごめん！！」どうすればいいんだ！何かいい方法はないか！？
あ！！そうだ！！
「なぁ、由香里、今日不動山に行かないか？？」よし！そこへ行って謝れば大丈夫だ！！しかもそこは祭りの時以外は全然人が来ないから土下座もしたって良い。
「疲れるからいい、、、、」
否定された。。。。。。。
結局その時間はそれっきり何も話せなかった。

昼、飯、
皆は弁当を食っている、由香里は弁当箱をカバンから出した、
しかし俺のは出さない、
「な、なぁ、俺のは？？」と聞くが、
「作ってない」と即答された、
だが、カバンと別に持ってきてる袋にはちゃんともう1人分の弁当箱が入ってる、
俺は考えた、もしこのまま行くと絶対に大変な事になる。
俺は立ち上がって、「由香里、行こう。」と言って由香里の弁当箱を袋に入れて左手で袋を持ち、右手で由香里の手を引っ張った、
「ちょ！何よ！！」と由香里は言う、
周りはペチャクチャ大声で話しをしてるから全然目立たない、
「離しなさいよ！エッチ！！」と由香里は嫌がるが俺は気にしないで廊下へ出て立ち入り禁止の階段を上った、
だがこれはまさしく、
痴漢！！

暴力！！
誘拐！！
下手したら、
テロ！！
になってしまう！！
「痛い！」由香里は怒鳴る、
俺は気が動転して由香里の軟らかくて小さくて可愛い腕を強く握っていた、、
俺はちょっと力を抜いて屋上まで上った。
俺は換気扇の出口をイスにして端っこに置いてあるボロボロで汚い机を持ってきた、
由香里を座らせて袋を机の上に置いた、
そして俺は土下座をして、「ごめんなさい！！」と精一杯謝った、
だが由香里は知らんぷりして立ち上がった、そして出口へ出てドアを閉めた、
しかも横開きのドアの内側に由香里は木を置いた。
あぁ～閉じ込められたのかぁ～、
「え！？マジかよ！？」俺は立ち上がって急いでドアのところへ行ったがもう由香里は
階段を下りてしまった、
どどどどうしよう！！
ここは立ち入り禁止だから誰もこない！！
俺は急いでドアのところへ行って叩きながら「おい！！出してくれ！！」と叫んだがもう遅い、、、、
「くそ！！」
俺は換気扇の出口に再び座った。
俺は考えた、
このままだと絶対誰も来ないで俺は死んでしまう。
俺は柵の方へ行った、
俺はパイプとかを使って下りれないかと思っていたが、

「無理だ。。。。」
ここは5階だから下りれる訳がない、
続いて、俺は物を落として誰かに気づいてもらおうと思ったが落とすものなんて弁当ぐらいしかない、
由香里が心を込めて作ってくれた愛情たっぷりの特性弁当を投げ捨てるなんて大馬鹿者がやる事だ、
俺は考え続けた、

そして1時間後、

チャラッチャッチャチャラッチャ〜〜〜〜
俺の携帯がなった、
恐る恐る開いてパスワードを入力した。

バカ！！
なんで携帯で呼ばないのよ！！
ちゃんとお弁当食べた！？
そのお弁当が最後なのよ！！
もう家に帰らないから、、、、
多分もう会わないと思う。
じゃあね。。。。

そうか、
よく考えたら携帯で呼べば良かったんだ！！
すぐにもう一通メールが届いた、

私お父さんに会いに行く。

俺は龍平に電話をして来てもらった、

「何ヘマしてんだよ宏ぃ、」と龍平は言ったが俺は無視して弁当を袋へ入れてダッシュで教室にもどり机に置いて猛ダッシュで不動山へ走った、
「お父さんに会う??ふざけるなよ!!会うって事はお前は不動山で自殺するって事だろ!?」俺は一人言を言いながらありえない速度で走っている。

数分後、
やっと不動山の入り口へ着いた、
俺は近道をしながら頂上を目指した、
「待ってろよ!!由香里!!」
俺は焦る気持ちをこらえながら険しい山道を走っている、

数十分後、

「由香里!!」俺は叫んだ。
展望台に由香里はいった、
「由香里!!」もう一度叫んだが気づいてくれない、
俺は猛ダッシュで走った、
だが由香里は展望台の柵を無理やり乗り越えた!!
俺は本当に猛ダッシュで走って展望台の階段を上った、
「由香里やめろ!!」
俺は由香里の肩を思いっきり掴んだ、
「へ!?どうして来たの!?」と由香里は言った、
「お前を守るからだ!!約束しただろ!!」
「本当にバカね、、、、」と由香里は言った、
「それよりこっちに来いよ!」
と言ったら由香里は素直に柵を乗り越えて戻った。
俺は由香里を抱いて
「ごめん」

と言った、
「・・・・・・・・・・うん」と応えてくれた、
由香里は俺に質問した、「ねぇ、いつ私を守るって決めたの??」
俺は少し考えたが本当の事を言った、
「3年前、由香里が病院の屋上から飛び降りようとして俺が助けた時から守るって決めたんだよ、、、、、、」
「やっぱりあれは宏だったのね、、、、」
「あぁ、」

由香里は小さい体を背伸びして俺にキスをした。。。。

「好き」

第8章「由香里と美里さんと時々不動山」（後書き）

読者の皆様こんにちわ、
今回も無事に書き終わりました、
解ると思いますが今回のタイトルはウケ狙いですｗｗ
やっぱり小説を書くのは大変ですね、
でも書いた小説や感想を読むと楽しくなるんですよ＾＾
最近つくづく思う事があります、それは、
終わり方がほとんど同じですｗｗ
でも僕はその終わり方が好きなんです。
挿絵は誰かにお願いして登場人物を書いてもらいたいんですけど誰も書ける人がいません（涙）
なので今のところ人物の挿絵は未定です。
もし「俺が書くよ」って方がいたら感想にてお知らせしてください。
なので今の段階では皆様は頭に中で、
シャナの青髪
だと思ってください。
ではここら辺で失礼します。

第9章「宏のバトル前編」

「ん？」
まだ夜中かぁ、
俺はぐっすり寝ていたが夜中にトイレに行きたくなって起きてしまった。
スト　スト　スト　スト　スト、
俺はゆっくり歩いた、
バン！！
「痛ッ！！」「あぁ～～最悪ぅ～～！！」
俺は足の小指をテレビの台の角におもいっきりぶつけてしまった。
「くそぉ～～誰がこんなところにテレビ置いたんだよぉ～～って俺が置いたんだよな、いまいましいぃ～～」と独り言を言いながらトイレへ行ってようを足してきた。
布団に戻ると隣で由香里がぐっすり寝ていた、
俺は由香里に別々の部屋で寝ようと言ったのだが「嫌よ！怖いもん！！」と子供みたいにわがまま言うからしかたなく一緒の部屋で寝ている。
俺は携帯を見て「まだ3時48分かぁ～寝ないとまずいな、」と言って横になった。

翌日
「宏！！」
「おい！宏！！」由香里が怒鳴っている、
「早く起きなさい！！」
まだ寝たいなぁ～～
「早くしないと遅刻するわよ！！」
「あぁったよぉ～」と俺は言って起き上がった、

２階へ下りて木のイスに座った。
パジャマを着てる由香里は上から下りて来た、
「なぁ、由香里ぃ～」
「なによ？」
「何でいつも朝のおかずは丸こげなんだ？？」と俺は質問した、
「べ、べつに良いじゃん」と由香里は答えるが言い訳がない！
由香里は風呂に入ったから「チャンスだ！！」と思い俺は鼻を摘みながら朝ごはんを食った。
ってか！由香里が朝風呂はいるから俺は夜しか風呂に入れないじゃないか！！
そんな事を思いながら俺はお皿を台所に置いた。
学校へ行くまで少少時間がある。
昨日、由香里と仲直りした後に本屋に行って「走り屋の世界」とゆう本を買った、
３階の俺の部屋に行ってパソコンで使ってるかっこいいクルクル回るイスに座ってそれを時間つぶしに読んでいた。
適当にペラペラ見ていたのだが一枚の記事があった！！

神奈川県横須賀市の伝説の走り屋ＡＥ８６男を求めて世界中の走り屋が箱根の峠を走りまわっている！！
名前は不明ですが彼はＡＥ８６でバトルをしていたところ事故って死んだと言われている！！
しかし最近地元の暴走族の方々から連絡があった、
彼はまだ生きている、
箱根のどこかで走っている！！

「そうか、、、、俺は走り屋だったのか、、、、」俺は事故を起こす前の事を考えていた。
もしあの時に事故らなかったら由香里と出会えなかったのか、、、、

俺は立ち上がって龍平に電話した、
「ほ～～い龍平だ～～」眠そうな声で電話に出てくれた、
「おはよう龍平、いきなりだが頼みがあるが良いか??」と真面目に質問した、
「あぁ??頼みって何だ??今度は由香里ちゃんにトイレの中で閉じ込められたのか??」とおちょくってきた、
「そんな事じゃないんだ、実は、、、、、」

ガシャーーー「宏ぃ～～シャンプーが無いぃ!!」
由香里が2階にある風呂から呼んでいる、
「あ、わりぃ～～由香里が呼んでるから電話切るよ」と俺は急いで言った、
「おぅ、じゃあなラブラブカップル」と龍平は笑いながら言いやがった、
「カップルじゃねぇよ、じゃあさっき頼んだのよろしくな、」と言って電話を切った。
「おい!宏ぃ!早くしてよぉ～風邪ひいちゃう!!」と由香里は怒鳴っている、
俺は急いで階段を下りて風呂場の入り口まで来た、
横開きのドアを開けようと思ったがよく考えるとそこにはセクシーな由香里がいるのだ。
「あぁ、そ、そこの棚に入ってないかぁ??」と俺は少し大きな声で質問した、
「えぇ～ないよぉ～～」と由香里は言うが無い訳ない、
「あるはずだろぉ～～」と言ったが、「無いわよぉ～～どこに隠したのぉ～～」と由香里は答えるが隠してなんかいない。
その時!!
ガタガタガタガタ
少しだけ強い地震が起こった!!
実際は驚くほどの揺れではないのだが、

ガラガラーー！！
「宏！！地震！！」と全裸で由香里は来た！！
おいバカ！！お前！！
「怖いぃ～」と由香里は言って俺に抱きついた、
由香里は濡れている、
温かい、
当然俺の服も床も濡れてるだろう、
揺れは直ぐに治まった。
が！
ドシ！！「うわ！！」
地震の次は由香里の蹴りがきた！！
「ななななな何するのよ！！変体！！」
俺の頭がおもいっきり床に叩きつけられた、
仰向けのまま「痛ぇ～～何すんだよ！！」と俺は言ったが、、、、、
「見ないで！！エッチ！！」と由香里は自分の腕で見られたくない部分を隠して言った、
俺は目を閉じて急いで俯けになった。
ドシ！！ドン！！
「ヒデブー！！！！！」
由香里は俯けになった俺の後頭部を本気で蹴っぱぐった！！
しかも俺の顔面は床に叩きつけられた！！
俺はあまりの痛さに気を失いそうになった、
由香里は風呂に入ってドアを、
バン！！
と閉めた。
俺は少ない体力だが自力で起き上がって鼻を触った、
「鼻血だ」俺は鼻血が出ているのを確認して首を上に曲げながら台所へ行った、
ッス
ティッシュを一枚取って鼻の穴に突っ込んだ、

そこに由香里がいつも持ち歩いてるコンパクトな鏡があった、
俺は「顔、平気かなぁ～」と言いながら鏡を見た、
やはり怪我していた、
顔の右側には痣が3箇所あった、
左側はさっきの鼻血が付いていた。
俺は慌てて放置してあるダンボールの中からぞうきんを取って由香里のせいで濡れた床を拭いた。

数分後、
由香里は風呂から出てきた、制服を着ている、
「ちょっと来なさい！」と由香里は言って俺の腕を掴んだ、
そしてソファーに俺を座らせて棚から救急箱を取り出した、「ほら！顔かしなさい！！」
と由香里は言って俺の髪を掴んだ、
「痛い痛い！！髪の毛引っ」まで言い掛けたのだが「うるさい！！」
と言いやがった、
俺はおとなしくしていたが由香里の扱いが乱暴すぎる！
ってか！「お前が怪我させたのになんで手当てしてんだよ！？」と俺は言った、
「・・・・・・・・・・・・・」
由香里は黙って俺の顔に絆創膏やらシップやらを貼っている。

「ほら！終わったわよ！！早く着替えてきなさい！！」と由香里は言って俺を立たせて背中を蹴りやがった、
「ヌハ！何するんだよ！？」と俺は笑いながら言った、
由香里は笑った。
俺は3階へ上って制服に着替えた。
着替え終わって2階へ下りると由香里はいない、もう玄関にいた。
「早くしなさい！遅刻するわよ！！」と由香里は言っている、
俺は1階に下りて「ごめんごめん、」と言って外へ出た。

登校中、俺と由香里は適当に話しをしていた。
「ねぇ！さっき見たでしょ！？」
「は！？」
「とぼけないで！！」
「み、見てないよ」
「絶対に嘘だ！！」
「ゆ、ゆゆ由香里のなんか見る訳ないよ」
「本当は見たんでしょ！？」
「だ！か！ら！見てないって！！」
「嘘だ！！」
「本当！！」
「嘘だ！！」
「本当だよ！！由香里のペチャパイなんか誰が見るか！！」
あれ！？由香里の口とほっぺの間の部分がものすごく痙攣してるぞ！！
「だだ誰だ誰がペチャペペペチャパイですって！？」
「あ！だだ、だからぁ～そのぉ～～」
ドガ！！
「痛ぇ！！」
由香里はカバンで俺の顔をおもいっきり叩いた、
「バカ！！」と由香里は言った、
運が良い事に誰にも見られなかったが死ぬほど痛かった！！
しばらくの間沈黙が始まったが少し経って、
「ねぇ、宏は何でいつもその黒いバンダナ被ってるの？？」と由香里は不思議そうに質問してきた、
そう、読者の皆様にはわからなかったかもしれないが俺はいつも頭に黒いバンダナを被ってたんだい、いや、正しくは付けてたんだ。
「あぁ、前に不動山でＤ－ｓｔｒｅｅｔに行って白人と喧嘩したって言っただろ？？」

「ディーストリート??」
「あぁ、俺達はどぶ板通りをＤ－ｓｔｒｅｅｒって言ってるんだ、」
「へぇ～～、で?それが何なの??」
「その喧嘩した白人が最後にこのバンダナをくれたんだよ、それで俺は暴走族の時に使ってた鉢巻を渡したんだ」
「変なのぉ～～」と由香里はカバンを後ろに移動して言った、
「じゃあ何で由香里はいつもあの青い鏡を持っているんだ??」
「あれはね。。。。退院した時に気の強い看護婦さんから頂いた大事な鏡なの。」と下を見ながら答えた。

数分後、
俺と由香里は学校に着いた。
学校に段々慣れてきた由香里は元気良く皆に挨拶をしている、
じゃなくて皆が由香里に挨拶している、しかも男ばっか。
教室に入ったら「おはようございます!」と美里さんが挨拶をしてくれた、
「あぁ、おはようございます」と俺は挨拶したのだが由香里が腕を引っ張って席に着いた。
その時に龍平が来た、
「ウィーッス宏ぃ～、」
「お!来たか龍平、」
クラスの皆はビックリしてる、
「ちょっと屋上に行こうぜ」と俺は行って龍平を連れて行った、
「ねぇ!私は!?」と由香里は言うが「すまん、ちょっと待っててくれ」と俺は言った、
「良いんじゃねぇの??」と龍平は言った、良く考えると隠す事ではないから俺と由香里と龍平は立ち入り禁止ゾーンを通って屋上へ行った。
「ねぇ、何するの??」と由香里は質問をした、「とりあえずそこにに座ろう」と龍平は言った、

俺達は換気扇の出口に座った。
「これがそのカードだ」と龍平は言って1枚の黒いカードを俺に渡した、
「あぁ、ありがとう」
「でも、本当に平気なのか??」と龍平は言う、
「解らない、」
「ねぇ?何の事??」と由香里は聞く、
「ごめんな、由香里、もう会えないかもしれない」
「え!?」と由香里は目を最大にでかくして言った、
「本当にごめんな。」
「何を言ってるの!?どうゆう事!?ちゃんと訳を言ってよ!!」
「本当にごめんな、俺、今週で死ぬかもしれない、あぁ由香里の親父さんと仲良くしてくるよ」と俺は言った、
由香里は立ち上がって「何言ってるの!?変な事言ってないで何があったのか言ってよ!!」と怒鳴った、
「すまない、来週に箱根の峠全てを使って世界最大のレースを行なうんだ、でも多分俺は途中で事故って、、、、死ぬ」

パシン!!
俺は由香里にビンタされた、
「そんな事して命を無駄にしないでよ!!」
由香里は今までで1番怒っていたかもしれない、
「でも、俺がやらないと中間達が地元の峠を走れなくなるんだ!!」と俺は言った、
「言わば戦争だよ、レースをして土地を奪う、もし勝手に敵の土地を走ったらイギリス人の殺し屋に殺される」龍平はそう言った、
「ダメ!!そんなのダメ!!何考えてるの!?そんなのもう宏には関係ないでしょ!!」由香里は必死だった、
「でも、ブラックザールスの野郎が汚い真似をしてあらゆる土地を奪ってるんだ、自分達の土地を守るために世界中の人々が宏を探し

て替わりにレースしてもらおうと考えてここら辺を走り回ってるんだ」と龍平が言った。
「もしかして、宏はそれで病院に入院したの！？」と由香里は言う、
「あぁ、そうだ、あの時にブラックザールスの奴らがオイルを撒かなかったら俺と由香里は出会ってないさ、」と俺は言った。
「そのブラックザールスと俺がバトルして勝たないといずれか全ての峠はそいつらの土地になっちまう」と由香里に言った、
「そう、、、、、」由香里は納得してくれた、
「じゃあ！私もそのバトルに連れてって！！」と由香里は言ったが隣に乗せる訳にはいかない「あぁ、じゃあギャラリーゾーンで俺の最後を見ててくれ」と俺は言った、
「・・・・・・・・・・うん」由香里は微かな声で答えた。
「時間がない、今日は学校をボイコットして古泉の家に行くぞ！古泉も解って学校休んでると思う、」と龍平は言った、
「ねぇ、小泉君の家ってどこ？？」と由香里は質問するが説明できない、
「まぁとりあえず古泉の家に行くぞ！！」俺は走った、
龍平も走った、
由香里も走った。
「あ！！」そうだ、由香里は走ったらダメなんだ！！
「由香里がかわいそうだから歩こう」と俺は言ったが「これくらい大丈夫よ、」と由香里は笑顔で言う、しかし絶対に走ったらダメだ！！
「ダメだ、歩こう、」と俺は言ったが、
「大丈夫だ、裏の駐車場に俺のＲ３４がある」と龍平は言っから俺は安心した。
数分後、
途中で、おい！君達！もう直ぐで授業だぞ！！と先公に注意されたが無視して裏の駐車場まで来た。

そこにはだだっぴろくてまっ黒で変なエアロパーツが付いてどでけぇウィングが付いてカーボンボンネットで2ドアのＲ３４があった。
俺と由香里は後部席に座り龍平は運転席に座った、
俺達は当たり前のように車を運転してるがこんな事が誰かにばれたら大変な事になる。
ガガガガガ
ブォォン！！
龍平はクラッチを切ってカーボン風のシフトノブを動かして１速に入れてクラッチをつなげてアクセルペダルを踏んだ、
ブォ！！ブォ！！ブォ！！
ブォォォーーーー！！
プシュ
ブォォォーーーー！！
プシュ
ブォォォーーーーーーーーーーーーーーーーー
「ねぇ、ねぇ、宏の車ってどんなのがあるの？？」と由香里は俺に質問した、
「あぁ、入院する前は3ドアのスプリンタートレノに乗ってたんだよ、通称ハチロク」と俺は言ってやった、
「そんな事言われても解らないよ」と由香里は言う、
「ほら、これが宏のハチロクだよ」と龍平は言いながら俺の８６が映ってる携帯を由香里に見せた、
「へぇ～～何か古くて遅そうな車だね」と由香里は言った、
当然だ、車に興味ない人が８６を見てかっこいいなど言う訳がない。
「俺は旧車が好きなんだよ」と由香里に言った、
「きゅうしゃ～？？」と由香里は言うが面倒だ、「宏は古くて遅そうな車に乗って速く走るのが好きなんだよ」と龍平は言った、
「変なのぉ～～」と由香里は言ってスモークが貼ってある窓ガラスから外を見た。」
それから沈黙が始まったが「宏が一番最初に乗ってたのって何の車

だっけ??」と龍平は質問してきたから、
「スターレット」
と俺は答えた。

数分後、
龍平の運転が上手いからうっかり眠りそうになったがようやく古泉の家に着いた。
俺の肩には由香里の寝顔が寄りそっている、
「おい、由香里、着いたぞ」俺は自分の肩を動かしながら由香里を起こした。
龍平はさっさと車から降りて古泉の家のチャイムを鳴らした、
「ん」と由香里は目を覚ました、
そして由香里は車から降りた。
「えぇ!?このでかいのが小泉君のお家なの!?」と由香里は目をでかくして言った、
「あぁ、そうだよ」と俺は言った、
驚くのは当たり前だ、古泉の父親はサラリーマンの社長であって超大金持ちなのだ。
俺と由香里は龍平がいる門の前に行った、
「あぁ、俺だ、今朝話しただろ?その準備をするぞ」と龍平は言った、
「ハイ、解りました」と古泉は言った、
ガラガラーと自動的にでかい門は開いた、
俺と由香里と龍平は５０メートルもあろうか超ロングな玄関を歩いた、いや、庭と言ったほうが正しいな。
「すごぉ〜〜い!!小泉君の家ってお金持ちだったんだぁ〜〜」と由香里は言っている。
向こう側を見るとそこには古泉が立っていた、
その時、後ろから車がゆっくり来た、
ＨＵＭＭＥＲ－Ｈ２のリムジンだった!!

「うわぁ～～生意気にリムジンに乗っていやがるぅ～」と龍平は言った、
その高級車は俺達の隣で止まった、
ウィィィーーーー
窓ガラスが開いた、運転手はヒゲを生やして高そうな真っ黒の制服を着て官帽子みたいなのをかぶってるおじさんだった。
「お車にお乗りになされますか??」と丁寧な言葉でおっしゃったので遠慮なく車に乗った。
数秒経って古泉の所へたどり着いた。
俺達が高級車を降りるとその高級車は裏に周って行った、
「こんにちは」と古泉は挨拶をした。
「おぅ、」と俺、
「よぅ、」と龍平、
「こんにちは」と由香里、
「でわ、準備してあるので例の場所に行きましょう」と古泉は言った、
俺達は来た道を戻り龍平のＲ３４に乗った。
「ねぇ、例の場所って何??」と由香里は聞く、
「まぁ、見てからのお楽しみだよ」と俺は言った、
由香里は目を細くして腕組みをし「まさか、私を皆でいぢめてＨな事しようと思ってるんでしょ!?」と言ったがそんなバカな事をする訳がない!!
「そんな訳ねぇよ、俺のガレージに行くんだよ」と俺は優しく言った、
由香里は俺を信じてくれたのか「あっそ、」と言って窓ガラスから外を見た。
数分後、
ようやく俺のガレージに着いた。
俺は誰よりも先に車から降りてガレージを開けた、

そこには新品のようで新品じゃない俺のハチロクがあった。
「よし！！古泉！キーをくれ！！」俺は嬉しかった、
「どうぞ」と古泉はポケットからキーを出して俺に投げてくれた。
俺はキーを挿してドアを開けてエンジンをかけた、
ガガガガ
ヴォォン！！
ブォォォーーーン！！
感動だ！！
再び８６に乗れるなんて思いもしなかった！！
「よし！！」俺はエンジンを切って車から降りた、
その時の由香里の顔は楽しそうな顔でもあった。
「古泉！！龍平！！早速作業に取り掛かるぞ！！」
俺は由香里に、そこの自販機でコーヒー買ってきてくれ、とお願いして１０００円を渡して俺と龍平は作業着に着替えた。

数分後、
「よし！古泉！キャンバーはフロントどれくらいだ？？」「８．２です」
その時、由香里は俺の８６に乗って寝ている、
全く、カスタマイズ中にその車に乗ってスヤスヤ寝ている人なんて普通いるか？？
俺はムカっとこない、むしろいい気分がする。

数時間後、
「よし！！」
俺は最後に黒いボンネットを閉めた、
ボン！！
その時に由香里はびっくりして目が覚めた、
由香里は車から降りて６歩ほど車から離れて、
「かっこいぃ～～～～」と目をキラキラして言っている。

俺は作業着を上だけ脱いで手袋を外して由香里の隣に行った、
由香里の小さい肩に腕をまわして言った「それだけじゃないぞ、エンジンは４Ａ－ＧＥ型じゃなくてＸＺ、５Ａ－ＦＥ型通称ヒャクトオのエンジンが積んであるんだ」その時の由香里の目はえらくでかくてキラキラしていた。
「よし、最後に座席を外してバケットシート載せるぞ」と俺は由香里の肩にやってた腕を戻して手を手袋に入れて奥の部屋からデカイダンボールを持ってきた。
それで龍平は猛ダッシュで座席、計４個を外した、
俺は２つのダンボールを開けてバケットシートを出して車に載せた、
後部席は載せないでニトロを積んだ。
「よし！」俺は手袋を外して古泉に投げた、「由香里、乗ってみろ、」と俺は由香里の背中を超優しく押してドアを開けた。
由香里はゆっくり助手席に座った、
俺は運転席に座ってキーを差し込んでエンジンをかけた、
ガガガヴォォン！！
俺はマジで感動した、
クラッチを切り、シフトノブに手をかざした、
コト
Ｎから１へ入れた、
クラッチをつなげてアクセルをいれた、
ヴォォン！ヴォォォン！！
俺は由香里を隣に乗せてガレージから出た、
ヴォンヴォン、
「行くぞ、由香里、」
「うん。。。。。」
ヴォォォーーーーーー！！
プシュ！
ヴォォォーーーーーーーーー！！
プシュ！

ヴォオオーーーーーーーーーーーーーー！！

プシュ！

ヴォオオーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーー

第9章「宏のバトル前編」（後書き）

読者の皆様こんにちは。
今回も無事に書き終わりました、が！
何か下ネタが多かったですねｗｗ
もしかしたら消去されるかもしれません（涙）
これから下ネタは無くすようにがんばります！！（汗）
それはさておき先週、俺が通ってる学校のすばらしい先生に第7章までを印刷して渡したんです。
正直、、、、
「あれは詰まんなかったよ、」とか「変換ミス多すぎだし文章が意味不明」とか言われるのかと思っていたが！！
「先生～～読んだぁ？？」
「あぁ、読んだ読んだ、おもしろいよ！」
「そりゃよかった、」
「ひろ○き君って才能あるんだね！すごいよ！」
「え？あいや、別にただ単に自分の妄想を書いてるだけだよ」
「それでもすごいよ！！」
「そうかなぁ？」
「あのね、先生はさぁ～絵と小説は才能だと思うんだよ」
とこんな感じに話していました、
本当に嬉しかったです！！
実は僕の家族の環境は非常に悪いんです、、、、、、
そんなことはどうでもよくて最近寝る時に必ず考える事があります、
それは
「今日こそ君が消えるその日までの世界になる夢を見てやる！！」
です、
しかし今だに見れません（涙）

今回の作品は車メインっぽかったですね、
後編も車メインのつもりです、そして。
元々この小説のジャンルは車と恋愛なんです。
作者の僕は車が少少好きなので色々書きたいです！！

では、また次回でお会いしましょう＾＾

第１０章「宏のバトル後編、そして」

ヴゥゥゥーーーーーー
プシュ！！
ヴゥゥゥーーーーーーーーー
プシュ！！
「ねぇ！宏！！」由香里はドア　アームレストと上に付いてる手すりにつかまって必死に喋っている、
「あぁ！？何だ！？」俺は車を１２０キロほど出していた、
「もっとスピードおとしてよぉ！！」と由香里は言うがこれくらいアクセルあけないと絶対に本番で負ける！！
「もう少し待ってくれ！！」
俺は人を乗せた車でスピードを出すのは大嫌いなのだ！
だが由香里は乗りたい乗りたい言うからしかたなく隣に乗せている、
「怖いよぉ！！」
「大丈夫だよ！」
「大丈夫な訳ないじゃ、あ！そこカーブだよ！！」
「あぁ、解ってる」
コト
ウァン！
ヴォォォーーー！！
コト
ウゥゥゥゥーーーーーーーー

数時間後、
何回も峠を上ったり下りたりしたからあっという間に夕方になっていた。
俺はハチロクで不動山に登った、

当然ボディーは汚れてると思う。
俺は山頂で車を止めて由香里と車を降りた、
由香里はかわいらしいタオルを口に当てていた、
「大丈夫か？由香里ぃ？？」と俺は聞いた、
「うん、、、、大丈夫、、」と由香里はタオルをポケットに入れて
俺と手をつないだ、
俺と由香里は展望台に上った。
ちなみに俺が着ているのはつなぎの作業着だ、そんで由香里は制服
を着ている。
「私、宏と会えて良かった」と由香里はニコニコして言った、
「おぅ、俺も会えて良かったと思ってるよ」
由香里は俺に肩を寄せた、
「宏ってあったかいね」と由香里は目を閉じて言った、
「暖かいのか？？」
「うん・・・・・・心が」
「そうか」
俺はこんな事しか言えなかったがお互い心で通じ合っている気がす
る。
「由香里、そこに座ろうか」と俺はベンチを指差して言った、
「うん、座ろう」と由香里は言った、
俺と由香里は手をつないだままベンチに座った。
「あったかいねぇ」と由香里は俺の手を由香里の膝に置きながら言
った、
「あぁ、もう少しで夏だなぁ～～」
「ねぇ、宏は夏と冬どっちが好き？？」と由香里は質問した、
「気分的に冬の方が良いけど夏はイベントとかいっぱいあるから夏
の方が好きかな」と俺は空を見上げながら言った、
「イベントってどんなぁ？？」と由香里も空を見上げながら言った、
「祭りとか水泳とかキャンプとか色々あるよ」
「へぇ～～、どれが一番やりたいのぉ？？」

俺はつないでいた手を離して自分の前にリスみたいに手をやって
「う～～ん、やっぱり怖い話かなぁ～～」と言った、
ピクン！！
と由香里は背筋を丸くした、
ひょっとして、「由香里、怖い話とか苦手か？？」
「え！？に、苦手な訳ないわよ」と顔を赤くして言った、
「あ！」俺は声を出した、
「何々！？」と由香里も反応した、
「後ろに誰かいる！！」と俺はジョークを言った、
「ちょ！や！やめてよ！！」と由香里は後ろを気にして言った、
「逃げよう！！」と俺は言って立ち上がった、
「やだ！！」
由香里も立ち上がって俺に抱きついた。
「冗談だよ」と俺は言って由香里を抱きしめた、
由香里は恥ずかしいのか顔を俺の胸に押し付けてこう言った、
「・・・・・・バカ」
そうかそうか、由香里は怖いのが苦手なのか。
俺は悪巧みを考えながら由香里を抱きしめた、
そのあと、俺達は家に戻って仲良く話していた。
「ねぇ、宏は何で車に乗ろうと思ったの？？」
「あまり覚えてないが小学生の時に家にあった原チャリを勝手に乗ってみたら面白くて乗るようになったんだよ」
「宏って車の運転上手だね」
「お、おぅ、ありがとう」
「本当にレースするの？？」
「あぁ、・・・・・・・すまない、、、、」
「自信はあるのぉ？？」
「自信はあるがブラックザールスがどこでどんな反則トラップを仕掛けるのか解らない」
「そう、、、、」

「でもがんばるよ！！」
「がんばってね！」
「おぅ、」
「・・・・・・ねぇ、散歩に行かない？？」
俺と由香里は由香里のわがままに答えて夜の９時頃に散歩へ出かけた。
「何でいきなり散歩に行きたくなったんだ？？」と俺は由香里に質問した、
「なんとなく、、、、ねぇ、手つなごうよ」と由香里は言った、
俺は由香里の手を優しく握った。
「暖かくて良い季節よねぇ～～」と由香里はつぶやいた、
今は春、
「あぁ、春は気持ちが良いなぁ～～」と俺は言った、
その時！！
「あ！流れ星！！」と由香里は叫んで後ろから俺が今履いてるジーンズのポケットに両手を入れて目を閉じた。
「何だよ？」と俺は首をねじって質問した、
「・・・・・・・・」由香里はまだ目を閉じている、
「あのぉ～～由香里ぃ？？」俺は話しをかけるが反応はない、
しかたなく俺も黙る事にした、
２０秒ぐらい経ったら由香里はポケットから手を出して再び俺の隣へ移動して手をつないだ。
「なぁ、今の何だ？？」と俺は質問すると、
「病院でねぇ、気の強い看護婦さんが言ってたの、流れ星を見つけたら大切な人のポケットに両手を入れて神様にお願いすると二人は結ばれる、って」
「・・・・そうか」
俺はそうゆうの信じないが幸せだ。
俺達は一緒に歩いた、
「由香里」俺は由香里に声をかけた、

「何？」由香里は答える、
「そんな事しても意味無いぞ」俺ははっきりいった
「え？何でよ！？」由香里はちょっとしかめっ面をしている
「だって、、、、俺達はもう結ばれてるじゃん、、、、」
俺は笑顔でそう言った。
由香里は、へへ、と可愛い声と顔で笑った。
俺達はニコニコしながら夜の散歩をしていた。

翌日、
今日の俺は珍しく自分で起きた、
だが携帯電話の時計を見ると午前１１時だった！！
俺は急いで制服に着替えて急いで１階下りた、
玄関まで来た俺は１つ気になる事があった、
今さっき階段を下りてる時に２階に由香里がいた気がした、
おかしいぞ！！由香里も学校を遅刻なんて考えられない！！
俺は２階へ戻ったら私服姿の由香里がいた、
「何してんのよ」と由香里は言う、
え？「学校は？？」と俺は質問した、
「はぁ！？何言ってんのよ、今日は土曜日よ」と由香里は苦笑いしながら言った、
俺はポケットから携帯を取り出して曜日を見た、
「土曜日か」
「そうよ土曜日よ」
「良かったぁ～～」
「ぼぉ～～っと突っ立ってないで早く着替えてきなさいよ」と由香里は笑いながら言った。
俺も笑いながら「おぅ」と答えて３階へ上がった。
俺はＤ１２の黒いＴシャツを着てＢ系のダボダボの黒いズボンをはいて「Ｓｌｉｍ　ｓｈａｄｙ」と掘ってあるネームプレートのネッ

クレスを首に掛けて黒いバンダナを被ってＤ１２の黒いキャップを被った。
２階へ下りると由香里はいた、
「何よその格好は、」と由香里は言った、
「だってラッパー系の服しかないんだもん」と俺は言った。
「そんな格好してヤクザとか怖い人にやられてもしらないわよぉ～～」と由香里は目を細めて言った、
「関東のヤクザと右翼は下っ端以外は全員知り合いだしもしやられても最近のヤクザは殺しはしないから心配ないよ、」と俺は言ってやった。
「あっそ」と由香里は言って干してあった乾いてる服をベランダから取り出して正座をして洗濯物を畳んでいる。
ってかこれって普通の生活なのかな？？
中学生の男子と女子が二人暮しなんておかしいぞ、
「なによ？」と由香里は言った、
「あ、いや、別に何もないよ」俺は言った。
俺は木のイスに後ろ前逆に座って由香里を眺めていた。
とても良い気分だ、なんっつぅ～か～～、こうして由香里が病気に関係なく暮らしているととても幸せだぁ～～。
「なによ、見ないでくれる、」と由香里は俺に言った、
こうやってツンツンしてる由香里が俺は好きだ。
「あ、いや、別に何もないよ」と俺は言った、
由香里は「変なのぉ～」と言って洗濯物を畳み終えて立ち上がった、
「ねぇ、宏ぃ、車の練習しないの？入院してから全然運転してないんでしょ？？」と由香里は言った、
たしかに俺は入院してから少ししか運転してない、多分感覚を忘れてるだろう、しかも俺の８６は新エンジンにフルカスタマイズだから前と違うはずだ、いや、８６じゃなくて１１０だ！
「そうだな、ちょっくら走ってくるよ、」俺はそう言って机に置いてあるキーを取った、

が、
俺はキーには何もつけないのだが布の手作りっぽい８６のキーホルダーが付いてた、
「由香里、これお前が作ってくれたのか？」と質問すると、
「そ、そうよ、邪魔！？いらない！？いらないんだったら外しなよ！」と右斜め上を見て言った、
「ありがとう、由香里」俺はお礼を言った、
由香里は俺の方を見た、
俺は階段を下りた、由香里も玄関まで来てくれた、「じゃあ行ってくるよ」と俺は言ったら「がんばってね」と由香里は笑顔で言ってくれた、
「おぅ、」
俺は外に出て車にキーを挿した、
ガチャ、
ドン！
俺はハチロクに乗り込みキーの差込口にキーを入れた、
ガガガガガガガ
ヴォォォン！！
ヴォン！！
由香里が作ってくれたキーホルダーを１０秒ほど眺めてクラッチレバーを踏んでシフトノブに手をかざした、
コト
ヴォ
ヴォォ
俺はクラッチをつなげてアクセルレバーを踏んだ、
ヴォー、
ゆっくり走り、国道へ出た、
ヴォォォーーーーーン
プシュ！
ヴォォォォーーーーーーン

プシュ！
ヴォォォォォーーーーーーン
プシュ！
ヴォォォォォォーーーーーーーーーーーーーーーー

数時間後、
俺は箱根の十石峠や七曲を猛スピードで下っている、
その時に対向車線で黄色いド派手のシルビアとすれ違った、「ペイントじゃなくて部品に金掛けろっつぅーの、」と俺は独り言を言ってたら後ろからそのシルビアが追いかけてきた、
「あいつ俺と勝負したいのか？」よしやってやる！！

コト
ヴォン！！
ヴォォォーーーーーーーーーーーーーーーン！！
プシュ！！
ヴォォォォォーーーーーーーーーーーーーーン！！
俺はコーナーを曲がってスピードをもっと出したがシルビアはバックミラーから消えない、
「やるな」
そのあと、４箇所ぐらいのコーナーを過ぎた、
ヴォォォォーーーーーーーーン！！
プシュ！
ヴォォォン！！
俺はストレートの先にある超高速コーナーを曲がった、
その時！！
ギュィィィーーーーーー！！！！
「何だ！？事故ったか！？」
俺はバックミラーで後ろのシルビアを見た、
「スピン！？」そのシルビアは後輪が滑って白煙を出していた、

「スリップ！？」俺にはそう見えたがバックミラーを見る余裕はない、
いや！
バックミラーを見なくてもすぐ斜め後ろにいる！！
背中から何かが感じる！！
これはマンガ的なセリフではなくマジで背中から何かが感じる！！

数分後、
俺とシルビアは長い峠を完走して下にあるパーキングエリアで止まった。
そいつにはギリギリ抜かれなかったがかなり速かった、
俺は車を降りてシルビアの前に行った、
そのドライバーは車から降りた、
「あなた速いですね！」とサングラスをしてるドライバーは言った、
「あ、いえ、あなたこそ速いですよ！！あのコーナーの曲がり方は何ですか！？」俺は質問した、
「あれはドリフトです」
「ドリフト？」
「知らないんですか？ドリフト」
俺は頭の中を整理しながら”ドリフト”を探した、
微かに覚えがある！
昔、龍平が俺に貸してくれたマンガ本”頭文字D”だ！！
「かしらもじDのやつですか？」と俺は質問したらそのドライバーは苦笑いしながらサングラスを外して、
「かしらもじDじゃなくてイニシャルDですよ」と言った、
イニシャルDってのか、初耳だ、
「ドリフトって速いんですか？？」俺は質問した、
「基本的に遅いですよ、ドリフトってのはスピードを求めないでかっこよく走るのが目的なんです」
やはり予想通り遅いかぁ、

「でも、良い選択をすれば時には速い時もあるんですよ」
なんと！？
「それは本当ですか？？」
「えぇ、本当です、ほら、ＷＲＣとかを見てると時々Ｒが小さいヘアピンコーナーでスリップさせてるのありますよね」
え？
「あれはわざとやってるんじゃなくて滑っちゃうからじゃないんですか？？」
「まぁ滑っちゃう時もあるけどサイドブレーキを引いてわざとスリップする時もあるんですよ」
そんな事がありえるのか？？
だってスリップってタイヤが限界でアスファルトの地面とこすれてる状況だろ？って事はエンジンの回転数が落ちてタイヤも減るから遅いはずだろ！？
「なんでそのドリフトとやらは速いんですか？」俺は真剣に質問した、
「本当にキツイコーナーは減速して曲がるより減速しないで後輪を滑らせた方が速いんですよ」とそいつは言った、
「・・・・・・そうか、ありがとうございます」
「いえいえ、それより、あなたのお名前はひょっとして宏さんですか？？」
こんな時は正体をあかすべきか、、、、
「宏？？違いますよ」
俺はそう言って車に乗った、
俺は車を発進してハザードを一瞬点けて礼をしてその場を後にした。

数時間後、
辺りはすでに真っ暗だ、
俺は由香里が待ってる家に帰るため高速道路を走ってる、

後ろから速い車が来て俺の左側の方で減速した、
「３５０Ｚか、」
そのＺの横には龍の絵が描いてあった、
ボンネットはカーボンだった、
俺はその車とストレートで勝負しようとしたがいくらＢＺ－ＶグレードでもＺにストレートで勝てるわけがない、
その時！！
ヴォォォーーーーーーー！！
後ろから黒いＲ３４が来た、
「まさか！！龍平！？」
そのＲ３４はＺを挟みＺの左側で減速した、

チャラチャッチャッチャラッチャ～～
携帯がなった、
龍平からメールだった、
「任せろ」
さんきゅう、龍平！
ＺとＧＴ－Ｒは猛スピードでストレートを走り抜けた。

数分後、
やっと地元に戻った、
俺は急いで家に帰った、
途中でＪＥＥＰとＨＵＭＭＥＲが走ってるのを見てクロカンをしていた時を思い出しながら我が家に帰った。
車を止めて家の中へ入った、
２階へ上がると由香里は昼ねをしていた、
ってゆうか今はもう午後の８時だ、
俺は由香里を起こさないように歩いたが！
バン！！
俺の足が木のイスにぶつかった！！

「ん、」由香里が動いた、
可愛い声を出しながら由香里は目を覚まして起きた、
「あんた、」と由香里は言いながら自分で自分の顔を触っていた、
「宏、私の顔に落書きしたでしょ、」と言うがそんな子供みたいな事はやるわけない、
「してないよ、それよりよだれ拭けよ」俺は言った、
由香里は「うぐ、」と言いながら可愛い唇に微妙についてるよだれを拭いた、
床に座ったまま由香里はあくびをして背伸びをして立ち上がった、
「どうだったの？」と由香里は言った、
「あぁ、最初は難しかったけどすぐになれたよ」と俺は言った、
「途中で誰かと勝負しなかったの？？」
「Ｓ１４って車に乗った走り屋と勝負したよ、当然勝ったぜ！」と俺は言った、
「へぇ～～～」と由香里はどうでもいいような顔で言った、
「腹へったぁ～～」と俺は呟いたら「じゃあここに行こうよ」と由香里は言ってチラシを顔の前に出した、
「バイキング？？」
「そう、バイキングよ」と由香里は恥ずかしそうに言った、
「由香里って少食だろ？？」と言ったら「うるさい！一度行ってみたかったのよ」と由香里は腕組みをして言った、
「着替えるから先に外に行ってて」と由香里は言ったから俺は外に出て車に乗った。
数分後、
由香里は家から出てカギを閉めた、
ん？待てよ？由香里ってあんな服持ってたっけ？？
そう、由香里は白がメインでえりの部分が水色のシャツを着て水色のミニスカートを履いて白い長い靴下を履いて白いスニーカーを履いてるのだ！！
すっげぇ～～可愛い！！

俺は由香里に見とれていた、
ガチャ、
ドン、
「遅れてごめんね」と言って由香里は助手席に座った、
「全然遅くないよ」と俺は言って車を発進した、

途中で信号待ちの時に「すっげぇ〜〜ハチロクだぁ〜〜」とか「イニシャルDだぁ〜〜」とか言ってる人がいたから由香里は赤面だった、

数十分後、
「着いたぞ由香里」と俺が言うと由香里は直ぐに車を降りて店の中へ入った、
俺も急いで車を止めて店に入った、
だが！
そこには人の行列があった！！頭がおかしくなりそうだ！！
「どうする、由香里」と言うが、「待つ」と即答した。
その時に女性の店員がが来た「やぁ！宏と由香里ちゃん」
そう、その店員は森井さんだったのだ、
「こんばんは」と由香里は挨拶をした、
「じゃあ君達カップルは特別に並ばないでもいいよ」と森井さんは言ってくれた、
本来ならこんな事はダメなのだがこの行列を待ったら確実に明日になっちまう、しかも森井さんは店員じゃなくてただのアルバイトなのだ。
俺と由香里は指定された小さい二人用のミニテーブルの所へ行ってイスに座った、
森井さんが来て「こんばんはお客様、初めてですか？」と言ってきたから「初めてだよ」と答えたら「では説明に入ります、こちらにある物は全て食い放題です、２時間で強制終了です、禁煙席なので

タバコはご遠慮ください、それと残った物は別料金になります、でわごゆっくり」と言って去って行った。
「あまり取りすぎるなよ」と警告したが
「大丈夫よ」と言って由香里はすぐに立ち上がってある物を取りに行った、俺は適当に肉系を皿に盛り付けた、
俺が席に戻るとまだ由香里はいないからしかたなく水を飲んで待つ事にした、3分ほどたったら由香里が戻ってきた、
「え！？マジで！？」
「い、い、いいじゃん、別に」
なんと由香里はケーキをあり得ない数を持ってきたのだ！
由香里はニッコリしながらケーキをほうばる、
俺はデカイ肉をかじる、
それで俺達は色々話しながら食い放題を楽しんだ、
が！

1時間46分後、
「宏ぃ～～これ食ってぇ～～～」と由香里は言っている、
「だから言っただろぉ～」
「だって宏全く説得力ないんだもん」と由香里はほっぺをふくらまして言った、
俺はちゃんと考えて物を取ったからギリギリ食い終わったから由香里の変わりにケーキを食べる事にした。

数分後、
「やっと食い終わったぁ～～～」と俺は言って最後の炭酸ジュースを飲んだ、
「すごいすごい、」と由香里は笑顔で言った、
俺達は立ち上がってレジへ行った、
料金は5千円位だったがあまり安いとは言えない値段だ、
俺達は車に乗って帰る間に何回も溜息をついた。

数日後、
今日はレースの日だ、
由香里はいつ日なく悲しそうな顔だった、
ちなみに現在の時刻は午後９時だ、
「じゃあ行くか、」
「・・・・うん」
俺と由香里はハチロクに乗って箱根の峠へ向かった。

数時間後、
俺は箱根の峠の山頂に着いた、
由香里には一番下のパーキングエリアで待ってもらう事にした。
俺はそこに集まっていた大人数のギャラリーの前を通りブラックザールスのリーダー高橋のＲ３２の隣へ行った、
いきなりカウントが始まった、
「５！」
「４！」
「３！」
「２！」
「１！」
コト
「ＧＯ！！」
キィ！
ヴォォォーーーー！！
プシュ！
ヴォォォォーーーーー！！
プシュ！
ヴォォォォォーーーーーーーーーーーーーーー
俺は心の底から由香里の事を考えていた、

だが、今はレースに集中しないとダメだ！！
まずストレートでは当然Ｒ３２の方が速い、

数分後、
俺は一度も抜けなかった、
残りのコーナーの数は６箇所、
俺はあの場所にかけた、
コト
ヴォン！
ヴォォォォーーーーーーーーーーーーー！！

「ここだ！！」
俺は死ぬ覚悟でサイドブレーキを引いた、
後輪が流れてる、スピンしそうだ、
Ｒ３２はオーバースピードのせいでインが開いた！！
俺はサイドブレーキを戻してクラッチをつなげて一気にアクセルペダルを踏んだ、
ギュュウゥゥ！！
「抜いた！」
俺はＲ３２を抜いた！
残りのコーナーは慎重に曲がってレースに勝利した！
俺は由香里がいるパーキングエリアへ行った、
車から降りて由香里を抱きしめた。
「勝ったよ、由香里」
「うん・・・・・・良かった」
「楽勝だったよ」
「宏なら当たり前よ」
「おぉ、ありがとう」
「・・・・うん、私、、、、宏と会えて本当に良かった」
「俺もだよ」と言ってキスした、

「私、、、、、」
「ん？何だ？？」
「私、、、、、もう、、、、、、、」
由香里が俺から離れてゆく、、、、、、
数秒、、、、俺は動けなかった、、、、
気づいたら由香里は俺の目の前で倒れていた。
「由香里！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8301c/

君が消えるその日まで

2010年11月11日19時51分発行